昭和44年12月23日第3種郵便物認可昭和46年11月1日発行毎月1回1日発行

日本バドミントン協会

バドミントン界

no.27
11
1971

THE BADMINTON WORLD



No.6000 FIVE ACE DELUXE



テクニックが冴える

ガット有効面のひろがり

〈バドミントンを科学する〉ヨネヤマのラケットは、ガットの有効面積が、広く設計されている。だから、どこで打っても、シャトルを鋭くとらえる。テクニックが、冴える。狙いに、くるいがない。シャトルとラケットの、一瞬の出逢い。この一瞬を、科学した結論です。ヨネヤマは、カンと経験だけを、頼りにはしません。あくまでも科学的に、探ぐり、割りだして、ラケットを造っているのです。

No.6000ファイブエースデラックス/￥3,500(フレームのみ)

ヨネヤマラケット



我が生涯の輝ける日

〝女王〟高木、華飾の典

Noriko Takagi, Uber Cup captain for Japan, got married recently. Bridegroom is also a former college badminton player, Mr. Nakayama.

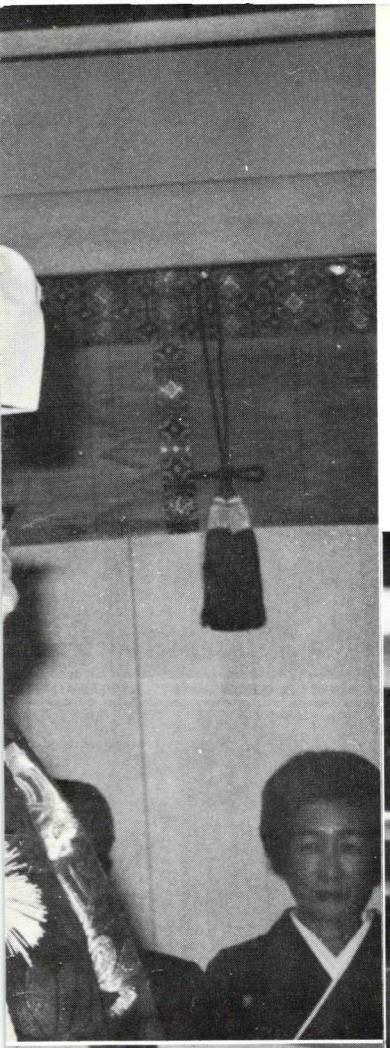
バドミントンの〝女王〟高木紀子さんが結婚した。新郎、中山広明氏は早大OB、北辰電機でコンピューターをあずかる〝第一線選手〟

華飾の典は十月三十日、東京目白の椿山荘で行なわれた。東京は、それまで二週間余も雨ふり続きだったが、どうしたわけか、当日は、アッとおどろく晴天に恵まれ「これもご両人の人徳」と関係者が口々に話のタネにした。

媒酌人は日本バドミントン協会の森友副会長ご夫妻。披露宴の参列者でバドミントンに関係ない人は一人もいない、というまさに〝バドミントン結婚式〟

ご両人はもちろん、本田会長らもニコニコのしっぱなし。結婚しても、ではない。結婚したから「なおさらユ杯では、頼りにして下さい」と、紀子さん、堂々、宣言していた。全国のファン各位も安心して下さい。

おめでとう。







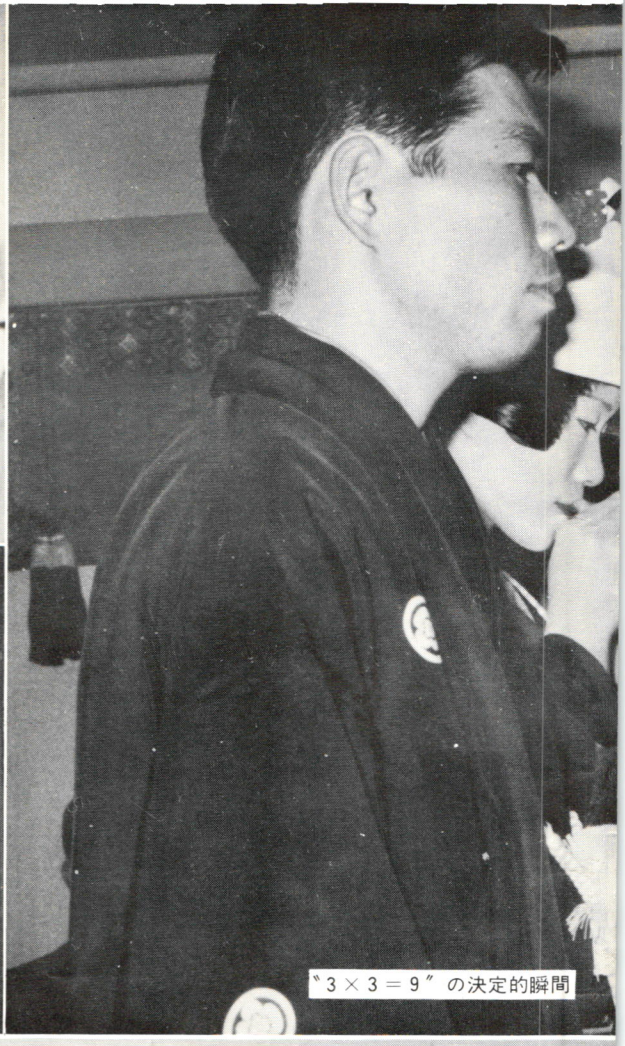
しずしずと、もっともらしく会場へ



「紀子さんは私の生命の恩人で」と本田会長



お色直し、もう打ちくつろいだ表情



〝3×3＝9〟の決定的瞬間



夫唱婦随、フィナーレは夫君の母校の校歌〝都の西北〟の合唱



いい国際試合をもっとふやそう

＝デンマーク女子招待試合に寄せて＝

今月の話題

デンマーク女子の招待国際試合が決まった（21ページ参照）とき、ある新聞記者が、わがことのように喜んで「よかった。これでボクも〝担当〟として、仕事のしがいがある。今後はもっと盛大にやろう」といってくれた。ありがたいことである。

その記者は、さきに本誌が取り上げた座談会「今度こそユ杯を成功につなげよう」（6、7月合併号）の出席者のひとり。その席上でも、口をすっぱくして、国際試合の必要性を力説していた。

およそ、競技の発展は〝選手・観客・報道（読者）〟の三者が、一つの気持ちにとけ合ってこそ、期待できる。

選手強化は、強い選手同士、それも、外国勢と対決することによって早いテンポで進む。強化のもとである競技人口の拡大、いわゆる普及も、いい試合を見る、見せることが、なんといっても近道である。

「底辺はレクリエーションであり別段、強くならなくてもいい。楽しければけっこう」と説く人もいる。それも一つの考え方だが、はたして、そうだろうか。シャトルがひと通り打てるようになると、だれか相手を見つけて、試合してみたい、という経験は、みんな持っている。

試合をやって勝ちたい、というのは、人間の本能であり、それがまた、スポーツの本質だ。

うまくなるには、教えてもらう、本も読む、それも、もちろん大切だが、いい試合を見ることも、非常にタメになる。いい試合は、見てたのしいにはちがいないが、同時に、無意識のうちに、なにかを吸収できることがすばらしいのだ。大選手の試合を見たあとで、ラケットを振ると、なんだか急にうまくなったような気持ちがした、という読者も多いだろう。

話がワキ道にそれてしまったが、そこで問題は、いい試合を見せる努力をすることだ。

考えてみれば、バドミントンほど国際的に強いのに、日本国内で海外選手との試合が少い競技はほかにない。

日本を代表する選手は、一年に何度か（あるいは何試合も）外国に出かけていくから、ほかの競技の選手のように、外人コンプレックスにかかって、実力を出せない、などという人はいない。これは威張っていいことだ。

しかし、外国遠征でどんなにすばらしい成績をあげても、その戦いぶりが新聞等で具体的にくわしく報道されることは少い。つまり、全国の大部分のバドミントン愛好者にはピンと来ない。

国内であれば、直接会場に行けなくとも、テレビで見ることができる。その刺激は、はかり知れないものがあるだろう。報道関係も、タイミングさえよければ、その取材を通じて、バドミントンの理解者となるし、理解する人がふえるだろう。

日本協会は、今度のデンマーク戦、ユ杯の機会をのがさず、愛好者を協会に密着させ、愛好者のプラスになる事業を、どんどん企画、実行してほしい。

今月号のダイジェスト

☆中国をめぐる動きと中国スポーツ界の現状　スポーツを通じての日中交流の動きがにわかに活発化してきた。本号ではこのニュースを伝えるとともに、スポーツ交流の窓口となっている日中文化交流協会の事情通村岡久平氏に、中国スポーツ界の現状を紹介してもらった。（P6～13）

☆黒潮国体特集　黒潮洗う紀州・和歌山県下で第26回国体の秋季大会が開かれた。結果はご存知のとおり、新潟県が総合と女子総合の二つを独占したが、本誌では、この全レコードを収録するとともに話題と問題点を多角的にとりあげてみた。グラフ巻末は国体ハイライトの写真集。（P14～19、37～40）

☆学生界展望、次代のエースをさぐる　ト杯、ユ杯をめざす全国の球児たち。このなかで、日本代表の座にもぐりこみ、次代を背負うプレーヤー〝金のタマゴ〟はだれか。第一線にもっとも近い学生界の情勢を調べてみた。今回はまず男子の部。次号には女子を登場させる。（P22～24）

☆すべり出し好調〝ばどみんとん昔むかし〟　若い読者の知らない、いまは昔の物語。第一回はいかがでしたか。今回は、これまた珍なるエピソードが登場する。選手の方が、ジャッジに当たった審判より、上級の審判資格を持っていたために、試合がとんでもないことになってしまって……（P20～21）

☆その他、技術講座も多彩　「初心者の疑問に答える」ではフットワークの重要性が語られ、足の運びはすべてのスポーツに共通の重要性を持っていることが強調される。

少年少女編では、いよいよ話が技術の核心に触れ「ホームポジションのとり方が、試合の展開に大きく影響する」と伊藤先生は強調する。中高校編の佐藤先生は「強い人がいたら、積極的に胸を借りて勉強せよ」とすすめ、上級編・三須先生のお話は、大型ダブルスのあり方の研究にはいった。

今月号の製作協力スタッフ
表紙／写真撮影・松井亮磨／同制作・小浜正道／グラフ撮影・山田真市／その他写真提供・協会関係者、愛読者／カットと絵・秦　浩、おおば比呂司

外スポーツ界

化をたどる

中国をめぐるスポーツ交流の動きは、その後も、火山のように休みなく活動が展開されている。

まず、卓球は、中国とともに新しいアジアの連盟をつくることになり、これにともない、台湾がメンバーである現在のアジア連盟は、空中分解する可能性が出てきた。

一方、バレーは72年1月に日本協会首脳が訪中することを決め、水泳は国際連盟に中国の復帰を呼びかけた。

しかし、これは否定され、ハンドボールも、韓国の説得で、台湾をふくむアジア連盟の設立へ動くなど、逆の流れも活発。

IOCも、いぜん〝台湾追放論〟にはとり合わず、情勢は複雑である。

バレーは協会首脳、中国へ

国際水連は日本提案却下

春の世界卓球選手権大会（名古屋）当時から、積極的に〝交流〟への意志を示していたバレーボールは、一月中に代表を中国に派遣、具体的な交渉に移ることになった。

日本バレーボール協会が、正式態度を決めたことは、前号（10月号）でも伝えたとおりだが、その後〝対日政治三原則〟をどのように具体的に処理するかで、慎重な研究を重ねていた。

台湾は追放しない、とブランデージIOC会長が、従来と変わらぬ態度を表明した。

国会のスポーツ振興議員懇談会（川崎秀二会長）は「台湾をはずし、中国を札幌五輪へ参加させるべきだ」とブランデージ氏に要請状を送った。これに対し、ブ氏から返事が届き、十二月二十一日に川崎氏から公表されたもの。

ブランデージ氏の返書の要旨は次のとおり。

「IOCは国を承認するわけではなく、各国のオリンピック委員会を承認するものである。中国は約十五年前に承認されたが、台湾のオリンピック委員会がメルボルン五輪に参加すると知って脱退したのは遺憾である。

台湾の委員会は常にオリンピック規定を守り、立派に地位を保っており、ミュンヘン五輪に参加する資格がある。われわれは政治組織には全く関係なく、これはわれわれがその政府を承認することを意味しない」

川崎氏は近く反論の予定。

IOCの態度は変わらず

協会を代表して訪中するのは前田副会長（西川会長の代理）岡田理事長、鵜月国際部長の三人。松平選手強化部長は、選手強化面の任務多忙のため、メンバーに加わらない。

問題となる台湾の取り扱いについては、どのような方針か、明らかにされていない。しかし日本はIF（国際連盟）の一員であり、台湾との国際試合での対戦を拒否したり、台湾をIFから除外するような動きをする場合には、逆に日本がIFから処置される恐れもあり、最終的な対策は、かなり複雑なものと見られる。

一方、日本水泳連盟の古橋常務理事（国際水連アジア地区代表）は、十一月中旬の国際水連理事会（シンガポール）に、中国を復帰させることを提案したが、賛成を得られなかった。

日本の案は①中国の国際水連内での地位をヘルシンキ五輪以前の状態（一つの中国）にもどす。②今後、国際水連の認める五輪、世界選手権などの国際競技に、中国の参加を歓迎するというものだった。

また、古橋氏は「非加盟国との競技会を禁止する」現行ルールを改正するよう提案したが、これも認められず、逆に「この規則に反すれば、処分の対象になる」とワクをはめられた。

〝陸上競技も交流を〟

織田氏がIFへ働きかけ

第九回アムステルダム五輪の三段とび金メダリストで国際陸上競技連盟の評議員・織田幹雄氏（日本陸連名誉副会長）は、十一月十五日「国際陸連に対し中国との交流を認めるよう、働きかける」との意向を明らかにした。

国際陸連には非加盟国との交流を禁止する規定があり、中国は国際陸連のメンバーとなっていないため、日本をはじめ、加盟国が中国と交流することはできない建て前になっている。

しかし、織田氏は、中国が世界的なレベルの選手を持っていることもあり、禁止条項を緩和させたいとの考え。日本陸連の意向も打診の上、来年八月にミュンヘンで開かれる国際陸連評議員会に提案する方針である。

織田氏の話国際陸連は台湾を〝チャイナ〟として認め、加盟させている。しかし、中国の優秀な選手を孤立させておくのも気の毒だ。もちろん、中国にも原則があり、話は簡単ではないが、国際陸連として交流できる糸口をつけるべきだと思う。

（11月16日付け東京新聞）

中国をめぐる内

動きさらに活発

日本、アジアから脱退

卓球　中国と新組織を結成へ

日中スポーツ交流の先駆者となった卓球は、台湾問題にからんで、アジア卓連から脱退し、中国とともに新しい組織をつくることになった。

日本卓球協会(後藤鉀二会長)は、十二月初めの評議員会で①アジア卓連から脱退する②中国などと協力、アジアに新しい連盟をつくる――と決めた。

これは、アジア卓連が適法性を欠いているためで、その理由は、国際卓連規約では「国際卓連に加盟していないものは、地域連盟(アジア、欧州など)にも加盟できない」ことになっている。台湾は、このケースに当てはまり、国際卓連は、一年以上も前から、アジア卓連に善処するよう要望していた。

このため、世界選手権の前、アジアの会長でもある後藤氏が、連盟に台湾追放を提案したが、否決されて、会長職を辞任した。

一方、アジア卓球選手権が72年秋、インドで開かれる予定になっているが、台湾問題にケリをつけないで開かれる大会は違法であるため、国際卓連の会長代行でもある後藤氏は、十一月初め、北京で開かれたAA卓球試合に集ったアジア各国に「インドで開かれるアジア選手権には参加しないよう」呼びかけた

その結果、アジア卓連メンバー国のうち、過半数に当たる国が同意、それとともに「日本と中国が中心となり、合法的新組織をつくるよう」申し入れた。

日本協会の決定は、これらを受けたもので、新組織は72年5月ごろには出来るもよう。アジア卓連には台湾、韓国、比国などしか残留しないことになった

バドは三原則無視？

＝中国側が言及＝

十一月十四日付け読売新聞朝刊(北京発・丹羽特派員)によると、十三日に北京で行なわれた日中国交回復国民会議代表団(飛鳥田一雄団長)と、中国全国体育総会幹部との会談で、中国側は「政治三原則を前提としない日中スポーツ交流はあり得ない」と強調した。

これは最近、日本国内で政治三原則は認めなくても、中国とのスポーツ交流はできるという観測が流れているのに対し、誤解を解くため、明確な態度をあらためて表明したものと見られる。中国側はこの中で、日本バドミントン協会にふれ「政治三原則を認めたといっているが、その態度決定の文書を綿密に見ると、国際的な大会では台湾と試合してもよいとの条項があるのは、三原則を認めたとはいいがたい」と言及した。これに対し日本協会の菊地日中部会長はこれは誤報に基く解釈であり、三原則を認めて台湾との対戦はあり得ぬと言明した。

台湾ふくむアジア連盟を

ハンドボールは来春、IFへ申し入れ

スポーツ界あげての〝中国歓迎〟ムードが高まりつつある中で、これまで中国と縁の深かったハンドボールに、逆の動きが出てきた。

ハンドボールのミュンヘン五輪アジア予選(東京、名古屋、大阪)のため集った参加国(日本、韓国、イスラエル)の代表者会議は、十一月十五日、来年三月にミュンヘンで開かれるIHF(国際ハンドボール連盟)理事会に〝アジア連盟〟を結成するための規約改正を日韓共同で提案することを決めた。

これはIHFに仮加盟の台湾(来年八月の総会で正式加盟を審議)をふくめるアジア連盟の結成を意味しており、日本が希望していた中国との交流復活とは逆の方向に動くことになる。

現行のIHF規約は地域連盟を認めておらず、これまでのいきさつからも、日韓共同提案は却下される可能性が強い。承認した場合は来年八月ニュルンベルク総会で賛成を得て決まる。

アジア連盟の結成は①アジア大会の種目に採用される②欧州中心のIHFに対抗する勢力を作る――等を目的としているが日本は四十年にナショナル・チームが中国に遠征、四十一年には中国チームが来日するなど、文化大革命までは、日中交流の実績を持っており、最近の国際情勢ともにらみ合わせ、交流復活を希望していた。この日の決定は、アジア連盟の結成を強く主張する韓国に引きずられた形で、共同提案国を引き受けたものとみられる。

なお、アジアでのこの競技は未発達で普及が望まれている。

中国のスポーツとその水準

村岡　久平



▶上海工作機械工場で

〈大衆中心の体育活動〉

夏の中国は、ことのほか暑い。じりじりと照りつける太陽の下で、まっ黒に日焼けした体が激しく動いている。北京飯店の近くにあるバスケットボールの屋外コートで、多数の観客が暑さも忘れて、試合を熱心にみていた。公園では、老人が七、八人、木陰で太極拳をさかんにやっている。万寿山で有名な頤和園に遊んだとき、昆明湖をたくさんの人々が隊列をくんで泳ぎ、横断をこころみていた。同行の中国の友人に聞くと、7月16日のための練習であるという。

毛主席は66年7月16日、風波をついて武漢で長江をゆうゆうと泳いだ。この革命的実践はプロレタリア文化大革命を推し進める中国人民に大きな励ましとなり、大自然との激しい闘争のなかで、さまざまな障害を打破してゆく革命的な意志をいっそう鍛えるうえに大きく寄与し、さらに体育活動の発展のうえでエポックを示すものであった。

五周年を迎えて、中国各地の河川、池、湖、海やプールなど、いたるところで多数の人々が参加して水泳大会が挙行された。この水泳大会は記録をあらそい、泳ぐ人は数人、観客何千人という競技会や選手権大会でなく、大衆が、一体となって、決意をかためて、整然と、目標に向って、互いに助けあって、遠泳をこころみることにある。「荒れ狂う風波の中で身体を鍛え、意志を鍛えよう」というものである。みんなが泳者となるのである。文化大革命勝利下の中国の体育活動の目ざす方向をこの中から見ることができると言えよう。

広州で聞いたところでは、約七万人が珠江に集って横断するという。広州市の人口は二百余万人、そのうち七万余人が、流れの速い大きな珠江の遊泳に参加するという。いわゆる泳ぎに自信のある者でないと参加はむずかしいと思われるだけに、これからみても、中国の水泳人口は非常に層が厚く大きなものであることが推察できる。

以上の状況から見てもわかるように、こんにちの中国の体育活動は、はっきりと広範な大衆が参加すること、大衆に奉仕することを、基本においている。そして、体育活動の発展は、人民の体位を著しく向上させ、中国の社会主義建設・社会主義革命をいっそう促進し、国防建設を強化し、各国人民とスポーツマンとの友好を増進させるうえで、いずれも究極的な役割を果している。

さらに重要なことは、「スポーツのためのスポーツ」「勝利第一主義」という考え方を否定して　毛主席のプロレタリア革命路線に導かれて、マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想を学び活用して、思想の革命化をいちだんと促している点である。とくにプロレタリア文化大革命の闘争・批判・改革を通じて、体育活動はいっそう革命化が行われ、毛沢東思想の統率のもとに、プロレタリア階級の政治を前面に

押出して、まったく新しい様相をもった生気はつらつとした姿になっている。文化大革命の勝利は、中国体育界の面貌を一新するとともに、「賞杯主義」「技術第一」などの名利思想をなげ捨てて、労働者、農民、兵士に奉仕する人民のための体育、プロレタリア体育活動を強力に推し進めるという未曽有の新しい高まりが、現実に中国で展開されている。

〈体育活動の革命化〉

ことしの6月10日は、毛主席の「体育活動を発展させて、人民の体位を向上させよう」という題詞発表一九周年であった。この題詞は、中国のいたるところの体育施設には必ず見られるものである。中国では、この題詞は中国人民の健康に対する毛主席の最大の配慮と愛護を深くあらわしており、また、中国の体育事業の根本的な方向を指標したものとして、非常にたいせつにされている。この題詞は52年に発表されたもので、新中国成立後三年目のときである。この問題について、ことし6月9日の新華社電は次のように報じている。

「十数年来、広範な労働者・農民・兵士大衆・革命的体育関係者とスポーツ選手は、毛主席の輝かしい題詞に導かれて、社会主義体育事業を積極的に発展させ、少なからぬ成果をあげてきた。だが、プロレタリア文化大革命以前、中国の体育戦線では二つの階級、二つの路線の闘争がずっときわめて激烈であった。闘争の中心は、体育事業はだれに奉仕するのか、どの道を歩むのかという問題であった。裏切り者・敵の回し者・労働貴族劉少奇とその体育界における代理人は、かれらが陰謀をめぐらしてさん奪した一部の指導権を利用して、毛主席の革命路線に気ちがいのように反対し、反革命修正主義の体育路線を大いに推し進め、体育事業を党の指導から遊離させ、プロレタリア階級の政治から遊離させ、労農兵から遊離させ、少数の者に奉仕する修正主義の邪道に引込もうとした。偉大なプロレタリア文化大革命は、劉少奇とその代理人の資本主義復活の陰謀を徹底的に粉砕し、毛主席の革命路線が深く人心をとらえ、中国の体育戦線の情勢はきわめてすばらしいものとなった」

プロレタリア文化大革命は、中国人民をきびしい試練に立たせたが、その結果、非常に強大な政治的成長をとげ、力量は飛躍的に向上した。こんにちの国際社会における中国の著しい躍進はそれを証明しており、ニクソン米大統領の訪中問題もそのことを如実に物語っている。

中国の体育活動は非常にすばらしい情勢にある。広範な体育関係者や選手は、農村、工場、鉱山にはいって、労農兵から再教育を受け、整ったコートやグラウンドなど恵まれた環境の中で、技術の練磨に専念し、勝敗と名誉を求め、拍手と賞杯の中で知らず知らずのうちにエリートになり、政治・労働・大衆から離反した中にどっぷりつかる思想をきびしく批判し、世界観の改造が徹底して行われた。「賞杯主義」「チャンピオン主義」「技術第一」などの思想は、資本主義を復活させる罪悪的なものとして闘争・批判・改革がつづけられ、こんにちの新しい情勢の中においても、なお粘り強く行われている。

北京体育学院の一角にあるりっぱな室内プール、オガクズをしいた二〇〇メートルのグラウンドをもつ陸上競技の屋内練習場などは、文化大革命の中で、紅衛兵によって、ブルジョワ体育思想を助長し、エリートを育成した〝修養の場〟としてきびしい非難の対象となったこともあった。

〈賞杯主義を鋭く批判〉

「体育活動を発展させて、人民の体育を向上させよう」、さらに「友好第一、試合第二」という方針は、プロレタリア革命体育路線を正しく表現したことばとして中国で強調されている。これに敵対するものとして、文化大革命の中で徹底的な批判が行われてきた「賞杯主義」思想がある。これについて「光明日報」（7月10日付）は甘粛省玉門石油管理局革命委政治宣伝組の経験を紹介している。

それによると――

(1)「賞杯主義」は、単純に「賞杯」を獲得するために、体育活動を一部のものの活動に変えた。あるときは、優勝を目ざし、生産現場から長期に離れて練習を行い、大衆の意見を無視し、逆に労働者がよろこぶ登山、綱引き、かけ足などの活動をそっちのけにして、大衆の体育活動をやく殺する毒矢である。

(2)「賞杯」をあらそうため、「物質的刺激」をもちい、ただじょうずで、第一位となれば、それで賞金を引きあげ、あるものは数級昇進した。何人かの選手は長期にわたり政治を忘れ、思想改造に注意をしなかったため、まったく堕落していった。まさに腐蝕剤である。

(3)「賞杯主義」があると、ただ「賞杯」だけしか眼中になく、友好と団結の気風は失われ、人民の健康を無視して、ただ試合で勝って負けたくなくなる。革命的風格は見られず、個人主義、売名主義、小グループ主義が助長される。大衆に奉仕することではなく、個人の名誉と利益のために奮闘す

ることになる。個人の「英雄」を見せびらかすため、グラウンドで手段を選ばず醜態をさらけ出すことになる。まさに発散剤である。

(4)「賞杯主義」に毒されると、「よい条件」「りっぱな設備」がなければ体育活動の展開はできないと考え、勤倹節約の思想は色あせ、自力でコートをつくり設備を整え、刻苦質朴、自力更生の観点から離れて「大型で、洋式の、完備した」ものを求め、大衆から遊離してゆく。勤倹して体育活動を進める大敵である。

「賞杯主義」を徹底的に批判しなければ、毛主席の革命的体育路線を実行することは不可能である——と結んでいる。

〈業余体育学校を みる〉

現在、中国の体育活動は国内的にも国際的にも新たな発展が開始された。

北京体育学院は新入生を迎えて授業は再開されている。すでに運動系（学部）には四〇〇人を越す新入生が加わって、従来四年制の教学年限を二年にあらためて進められ、新入生は二〇歳に満たない労働者、農民、兵士の出身者であるという。

余暇を利用した青少年のための体育施設である業余体育学校は、各地で授業が行われている。私は7月上旬、北京の西城区にある業余体育学校を訪問した。七歳から一六歳までを対象とし、訓練によって体育活動の基礎を発展させる場として、たくさんのこどもたちがプールで、卓球場で、体操館で、グラウンドで、熱心に指導員の手ほどきを受けてトレーニングに励んでいるのを見学した。文化大革命前は十一歳の児童から入学が許されていたが、現在は七歳から参加できるようになっている。ここにおいても単にトレーニングのみに終るのではなく、毛主席著作の学習、設備の補修の手伝い、近郊に出向いて農業にいそしむことも一連の教程の中にくみこまれている。ここの児童は、小中学校における体育活動の積極分子で、学校に帰っては教師の助手の役割をしばしば行うそうである。

私が見学した業余体育学校で行なっている種目は、卓球、水泳（飛込みも含む）、バスケットボール、バレーボール、サッカー、体操、武術、基礎訓練としての重量挙げ、スケートの八種目であった。とくに興味深かったのは、スケートを履修している児童が、コンクリートのコートでスケート靴に輪のついたのをはいて汗を流して何回も何回も滑走をしていた光景であった。

業余体育学校は課外時間と学校の休みのときに開放され、一人は一週間三～四回で、一回は二時間となっている。ここで卓球を履修している人数は二八〇〇人で、教師は五人が担当している。かつてここの練習場から荘則棟選手を生んだと説明してくれた。練習が終ると汗をふく間もなく、こどもたちは卓球台を整理し、付近を掃除してボールをふいている姿が見られ、三、四人で集って、きょうの訓練の検討会をやっていた。

バスケットボールをしていた女子学生たちは、練習の前に整列して、「団結して、さらにいっそう大きな勝利をかちとろう」「警戒心を高め、祖国を守ろう」という毛主席のよびかけを全員で唱和していた。

業余体育学校の責任者は「われわれは青少年を、徳育、智育、体育をかねそなえた労働人民に育てることを目的として、計画的に体位と学習の向上を促すための基礎づくりを行なっている」と述べ、さらに「大衆的な体育運動を促進するには、普及と向上の関係を正しく認識し、処理しなければならない。体育の普及と向上には、プロレタリア階級の政治に奉仕し、労農兵に奉仕する正しい方向を堅持しなければならない」と説明してくれた。

私たちは上海で、上海卓球工場を参観した。ここで生産される「紅双囍」というボールは国際卓球連盟公認球であり、ことし11月3日から北京で開催される「アジア・アフリカ卓球友好招待試合」の使用球になっているが、この工場の労働者は二八〇人で、そのうち二〇〇人近くが女性である。昨年は六種類のボール二五〇〇万個を生産したという。ことしの目標は日産一〇万個以上で四千万個達成を目ざしており、現在二交替制で生産を高めていると話してくれた。現在卓球のボールは全中国で生産される総数は二億個にのぼるといわれる。日本の関係者の話では、日本は年産二千万個までいっていないということであった。

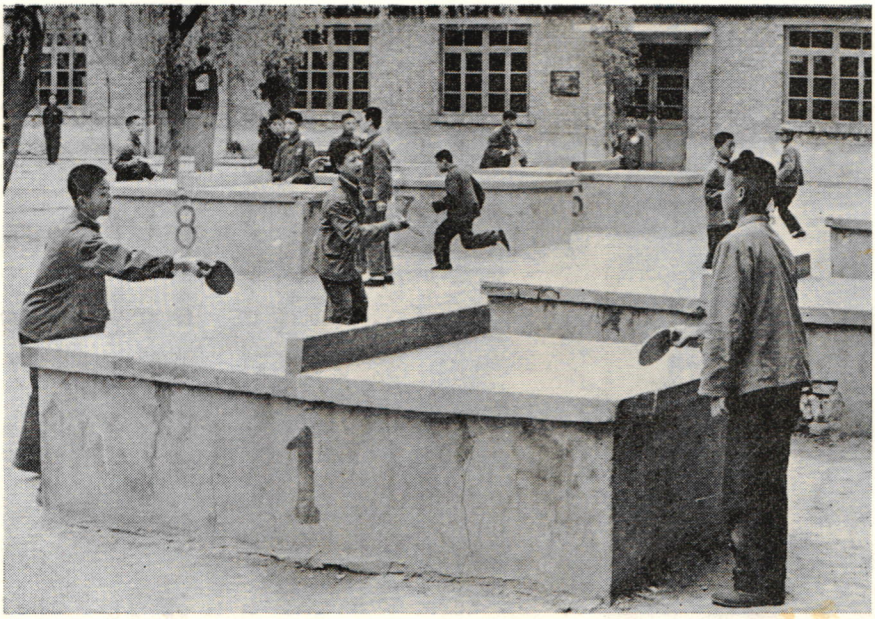
広州にある工場では「勝利」というボールをつくっていたが、日産五万個がことしは可能であるという。このような例をみても、大衆的な規模で体育活動の普及が進められていることを見ることができよう。

普及が正しく行われる結果、向上はおのずから促されるのは当然のことである。ことし3月下旬に来日した中国卓球代表団の力量は、このような中国の体育活動の新たな発展の中からもたらされたものである。

〈軍事体育の大衆化〉

大衆的な体育活動を広範に発展させるとともに、各地の広範な大衆は戦争に備える活動と結びつけて、軍事体育活動を積極的に繰広げている。この両者の併用は、こんにちの中国のプロレ

タリア体育活動の特徴である。「警戒心を高め、祖国を守ろう」、「戦争に備え、自然災害に備え、人民のために」という毛主席の戦略方針を堅持して、広範な民兵組織は、体育活動の展開を民兵訓練と緊密に結びつけている。軍事体育活動は、民兵、紅衛兵組織をいっそう強化させ、「一に苦しみを恐れず、二に死を恐れない」革命精神と、中国人民解放軍の「三八作風」の優良な作風をつちかい、組織性と規律性を高めている。



◀北京師範大学第二付属中学校で

各地の工場、農村、学校、機関では多数の人人が参加して行軍、野営訓練などの軍事体育活動が広く実践され、国防を強化して、民兵組織の骨幹的役割を十分に発揮している。文化大革命の闘争の中においても、解放軍の支援のもと、軍事体育活動は活発に展開されており、かつての著名選手は、思想の革命化の中で軍事体育活動の積極的に推し進めて、身体の練磨はつづけられていたものと思われる。

私は上海の虹口区にある広嶺路小学校を訪問して、小学校における体育活動を見る機会をえた。一三〇〇人の児童は、朝の七時二〇分の始業から二〇分間、毛主席著作を学習することから一日の授業がはじまる。ここでも体育活動は、軍事的な活動と、大衆的な活動がたがいに結びあい連携しながら行われていた。クラスには班があり、一クラスが一小隊（排）となり、約四〇人であった。校庭でその活動を見せてくれた。

まず小隊長を先頭に班ごとにならんだ一隊が整然と行進を行なって入場する。行進をきちんとできるようにすることはたいせつなことであり、軍事体育活動の基本であると言われている。高学年になると、遠くまで整然と隊列をくんで行軍することを一カ月に一～二回は行なっている。

次に点呼を行い、号令を学びあう。順番に小隊長の号令を復唱しあい、各人が小隊長、班長となり得るように訓練を行う。そして、右に左に後ろに前にと、整列の訓練をきびきび行い、各班、各小隊が秩序だって校庭をカケ足する。走りながら大声で「毛主席に従って、革命の赤旗を高くかかげ、勝利のうちに前進しよう」という革命歌をうたうのである。そして「決意をかため、犠牲を恐れず、あらゆる困難を克服して、勝利をたたかいとろう」と、毛主席語録を叫んで軍事訓練をおわる。約二〇分あまりであるが、低学年から高学年にいたるまで、実にきちんと行われ、児童の組織性と規律性はみごとなものである。

〈荘則棟・李富栄の下放〉

中国における軍事体育活動は、体育活動の最も基礎をなすものであると私は思った。私は農村の人民公社の軍事体育活動は見なかったが、それぞれの特徴を生かし、簡単な資材を利用して活発に進められていると説明してくれた。軍事体育活動は、大衆的な体育活動を発展させるものであるとともに、民兵組織の中心的活動のひとつになっている。私たちは中国の体育を考える場合、軍事体育活動がもつウエートを見逃がしてはならない。中国人民解放軍に学ぶ作風を、大衆が積極的に軍事体育活動を行なっている中に見ることができる。

政治を学び、労働にいそしみ、大衆とともに生きる精神をつらぬく中国においては、スポーツ選手も同様、農村に一定期間はいって、農民とともに生活し、同じ食事をして、労働に参加する。この作風は、現在全国的に行われている。来日した中国卓球代表団の荘

則棟選手らは、山西省南部の長治市に行き、農業労働に参加し、余暇をみては農民のために模範試合を行なって交歓しあったと言い、私たちは謙虚な気持で農民に学び、農民から再教育を受け、世界観の改造につとめた経験を聞いたことがある。

李富栄選手が山西省の体験として語ったことは、印象深かった。彼は、農村で労働に参加したとき、大都会で育ったために糞尿車を見ると、ハンカチで鼻をおさえ、さけて通った。しかし、いまは疲れもよごれもいとわず、労働に励む中から気にならなくなった。そして謙虚な気持で貧農・下層中農の再教育を受け、労働すれば思想を改造できる、という確信をつかんだ——と。



◀上海工作機械工場で

〈批判された競技種目〉

中国の体育関係者の話によると、当面は全国的規模での各種競技大会は行なっていないと言う。59年と64年の二回にわたり、北京で全国体育大会が開催され、各種競技に全国から選手が集ったことがあった。

しかし、たとえば上海では、ことしにはいって約一〇万人の初級中学生が参加した卓球大会が開かれ、近く高級中学（高校にあたる）の大会が開催される予定だという。昨年は、上海だけで七〇～八〇万人にのぼる大衆が卓球大会に出場したという。日本では体育の日に、全国で一〇〇万人参加の卓球のつどいを念願しているが、上海の人口一千万余の約一割に近い人々が卓球を行うという。底辺はまことに広いものである。

中国では見るスポーツより、スポーツに参加する考えが浸透している。最も多いのは、中国では卓球である。そして、バレーボール、バスケットボール、サッカー、バドミントンなどの球技、体操、水泳、陸上競技（とくにラソニング）、登山等が多くの人々に類しまれ、伝統的な武術や太極拳も人気を集めている。

ところが、ボクシングやラグビーなどは行われていない。人が人をいためつけ、打倒することは正しくないという、きわめて自然な考えに立つものである。

最近はテニスは奨励されていない。手入れを加えたコート、広い場所のわりに少数の人だけしかプレーできず、用具も安くない。テニスが奨励されないのは大衆参加を第一におくところからくるものであろう。

文化大革命　は重量挙げがさかんで軽量、中量級では国際水準をはるかに越えた好記録がいくつか見られ、陳鏡開選手は56年、中国で史上初の世界記録を樹立している。しかし現在は、基礎トレーニングの課目として重量挙げはあるが、競技としては以前のように行なわれていないという。重量挙げはフライ級、バンタム級というように、体重によってクラスがある。選手はクラスというきびしいリミットの中で、激しいトレーニングをつむと同時に、そのリミットを維持するために実に苦しい過酷な制御を自分の肉体に功える。

節食からはじまって、減量のためにむし風呂で長時間汗を出し、試合当日は水も飲まないこともある。このように人間の全面的発展を極端にいためつけるスポーツは積極的に行わないという。

〈中国のスポーツ水準〉

ことしの春には、サッカーのナショナルチームが広州で、バドミントンが福州で、スケートが満州里で、卓球、バレーボールと体操が北京で、また陸上競技が南方でというように、それぞれ合宿が行われたということを聞いた。

文化大革命による、いわゆるブランクのため、技術レベルは低下しただろうという観測をみごとに破って、中国卓球選手は名古屋で開かれた第三一回世界卓球選手権大会で、五〇数カ国参

加の中で、七種目のうち四種目のタイトルを獲得したことは、記憶も新たなものである。

陸上競技の走高跳で倪志欽選手は、昨年11月8日、湘南省長沙市労働体育場で、二メートル二九というすばらしい記録で、世界新記録をマークした。63年ソ連のブルメル選手が二メートル二八の世界新をマークしたことを知った北京体育学院在学中の倪選手は、もっとよい記録を出して毛主席と社会主義祖国のためいっそう努力しようと決意した。彼は毛主席の「われわれは世界各国が技術発展の面でたどってきた古い道にそって、他人のあとからのろのろとついていくべきではない」という教えに基づいて、外国文献にある「体の全面的発達をふまえて専門種目に重点をおく」という考えをあらため自分の体質は比較的劣っているが、専門種目のテクニックはわりあいすぐれているという特徴を考慮して、トレーニングの際には専門種目の練磨に重点をおき、体質の鍛練を専門種目のテクニック向上に利用することにした。こうして、倪志欽選手は自分の長所を伸ばし、短所を補って、独自の道を切りひらいた。

現在、卓球はいうにおよばず、陸上競技、バレーボール、サッカー、バドミントン、体操、スピード・スケートなどは世界のレベルに堂々と迫り、いくつかの種目は世界のトップにすでに立っているものがある。

お断わり　本欄の記事と写真は朝日新聞社発行「アジア・レビュー」に掲載されたもので、ともに同社のご厚意により、とくに本誌に転載させていただきました。

筆者・村岡氏は、本年春、名古屋市で開かれた世界卓球選手権に中国が招待されたおり、日中卓球界の間に立って、その窓口として活躍しました。

以後、両国スポーツ界の交流については、精力的なエネルギーを発揮、現在の中国スポーツ界第一の事情通です。

〈国際交流と友好第一〉

私は日本卓球協会会長・後藤鉀二氏とともに、7月9日から北京で開かれた「アジア・アフリカ卓球友好招待試合発起国準備会議」に出席した。中国、朝鮮民主主義人民共和国、ネパール、アラブ連合、モーリシャス、日本の六カ国の代表が参加した。会議は二日間きわめて友好的　ふんい気の中で行われ、同友好招待試合を、11月3日から13日まで北京で開催することを決定した。アジア・アフリカ諸国人民とスポーツマンの友好と団結を促進するうえで、きわめて意義深いものがある。国際情勢を反映し、アジア・アフリカ諸国の新旧植民地主義に反対するたたかいの発展の中で、同友好招待試合は成功を収めるにちがいない。さらに、同試合は「友好第一、試合第二」の精神を文字どおり結実させる場にしてゆきたいと考える。

中国は体育の国際交流を、各国人民の友好と団結を深く強め、スポーツマンの友情と技術の向上を図るうえで、きわめて重視している。

中国卓球代表団が「友好第一、試合第二」の原則をかざし、「ピンポンの玉は軽いが友情の重みははかりしれない」と強調、友好の輪を日本と世界に大きく拡大させた。選手たちは、きわめて謙虚な態度で、互いに学びあい、共同してわざをみがく精神を終始もちつづけ、日本の各方面から大歓迎を受けた。そしてアメリカ卓球選手団の訪中にいたって、興奮は絶頂に達した感があり、いわゆる「卓球外交」なることばも生れるにいたった。体育交流は、革命的外交路線の一環である。

ことし2月1日、北京で日本卓球協会、日本中国文化交流協会、中華人民共和国卓球協会、中国人民対外友好協会の代表は「会談紀要」に調印した。とくに日本卓球協会は、政治三原則（①中国敵視政策を実行しない、②「二つの中国」をつくる陰謀に加担しない、③日中両国の国交正常化を妨害しない）を順守し、日中友好と卓球交流を促進することを決意した。この決断はこんにち内外の高い評価を受け、8月中旬には、日本ジュニア卓球選手を中心に約五〇人の卓球代表団が訪中。原則を堅持し、日中体育交流は、今後ますます発展してゆくであろう。

中国の体育は文化大革命を通じて面貌を一新した。中華全国体育総会、各競技団体や施設など関係機関も整備が行われ、国際交流も世界卓球選手権大会参加を中心に活発に動き出し、最近ではバスケットボール選手団がラテンアメリカ諸国、陸上競技がアルバニア、卓球がアフリカ諸国などを訪問し、アメリカにも卓球選手団が訪れることであろう。さらに相ついで友好諸国のチームが中国を訪問している。首都体育館はじめ各地で、各種目の模範競技会が、ひんぱんに開催されている。

日本の体育界の人々は、国際情勢の急速な動きを正しく見つめて、中国との友好と交流について対処するときにきている。中国の体育界と人民は、日本との友好と交流の促進を願っていることを、私たちは忘れてはならない。

（むらおか　きゅうへい＝日中文化交流協会事務局次長）

（写真＝朝日新聞大阪本社写真部・玉田耕三郎）

国体・三つの問題点

基本的あり方、再考の機

ほしい新陳代謝、お祭気分の一掃

東大阪短大監督　佐藤茂雄

みごとなミカンの鉢植えが、会場周辺に多数設置され、さすがは〝紀の国、ミカンの国〟を思わせる情緒が、そこかしこに漂い、また地元の人達の心あふれる接待等、参会者一同心のなごむ思いであった。

26日には、中国の国連加盟承認の報に接したり、27日には第一会場に常陸宮ご夫妻をお迎えするなど、緊張の中にもなごやかに終了したのは喜ばしいことである。

☆

反面、いつもながら残念に思うことが数点ある。そのおもなもの三点を列記して見よう。

一、参加者の中には「祭気分」「観光気分」での選手達が相当数いる。

高校生達もいる中で、悪影響を及ぼさないかと心配である。

ゲーム展開にしても、最初から闘志のない選手や府県が、かなり見受けられた。郷土の名誉と期待をになっての参加であるはずだ。もっと真剣にプレーをしてもらいたいものである。

力一杯プレーをして敗れたならば、しかたがない。いやしくも、国体選手と呼ばれ、競技会に参加するからには、それなりの準備と覚悟をもって参加してもらいたい。

二、選手の顔ぶれが毎回、あまり変わらない。

高校や大学でのバドミントン人口は相当数増えているにもかかわらず、新陳代謝が非常に少い。どこかに大きな問題点があるように思われる。

その問題を解決しないことには、せっかく高校や大学で懸命にやっても、尻切れトンボの感がしてならない。

バドミントンが国民のスポーツとして、根をおろすには相当の勇断と環境整備が必要。そうでなければ、上っすべりの空回りに終わるような気がする。

いくら選手が懸命にやりたくとも――なかなか思うようにゆかないようである。

地方に住んでいる選手で、練習さえ積めば、かなりの好成績を収められる力量の持主も多勢いるのだが、全く気の毒としかいいようがない。従って「お祭気分」に、つい走って行くことも考えられる。

現在は一般男子のみフリーであるが、バレーボールのように輪番制にしてはどうか。翌年は一般女子がフリーになり、さらにその翌年は高校男子のみがフリーとする方法である。

日バで過去、何回か討議されたようであるが、もう一度考えなおす必要があろう。ブロックによっては、全国のトップが集中しており、出場すれば二、三位の成績をあげられる県が、毎年いくつかある。

逆に弱いブロックから幸運にも出場し、また組合せにも恵まれて上位入賞することもある。真の実力、とはいえないし、公平ともいえない。

種々、困難な問題はあろうが前向きの姿勢でバドミントン競技発展のため、脱皮を考えて、斬新なシステムなり、アイデアを打ち出してほしい。

☆

なお、ダブルスのサービスでオーバーハンドが極端に目立ったのは、各府県の指導が周知徹底していなかったためでなかろうか。一刻も早く全国のヨコの統一が必要である。

技術的には、なんら見るべきものがなかった中で、教員男子高校男子の地元和歌山県、及び高校女子の福島県の健闘が印象に残った大会であった。

三、国体のあり方についても、今、真剣に考えねばならない時期ではなかろうか

特に地方の選手達は、せっかく代表権を獲得しても、練習会場が遠くのため合同練習なり、強化練習が思うようにいかないのが実状である。

本番迄に一、二回しか練習が出来なかった、という県も相当あった。これでは交通機関に恵まれた都市の選手達には、到底勝てるはずがないし、差も縮少されない。



湯浅は町ぐるみ　バドミントン

「私たちの町ほど国体競技種目と町民が結びついているところは、ほかにはまずあるまい」湯浅町バドミントン・クラブの井角武雄副会長は胸を張った。

町民のスポーツとして同町にバドミントンが現われたのは四十三年。同町で全日本社会人大会が開かれたのがきっかけ。公民館活動として町内各地で講習会が開かれ、昨年はじめには町民愛好者のクラブが誕生した。

当初、三、四人だった愛好者もいまは百人を越す盛況。今年は第一回の町民大会を開き、また男女中学生が初めて近畿中学生大会に参加するなど、バドミントン熱は燃え上がっている。

「チョウのように飛びかう白く小さい一個のシャトルコックを打ち合う競技なので、だれでも気軽にできる。しかし、これほどむずかしい競技はない」

井角副会長がいうように、試合を見ていると、実に激しい動きと細かなワザが展開される。

新潟県に晴れの会長トロフィ

〔黒潮国体〕　二年ぶり五度目の総合優勝

地元も健闘3位，四種にムラなく入賞

第26回国体（国民体育大会）のバドミントン競技は十月二十五日から二十八日までの四日間、黒潮洗う紀州路の和歌山県湯浅町・湯浅中学と耐久高校の両体育館で行なわれた。

今年は、沖縄が一般男子と一般女子の両種目にエントリーして活気をそえたが、反面、一般女子では高木、湯木、相沢、竹中ら第一線級が、登録規定などの関係で不参加となったため、さびしい点もあり、また、これにともなう番狂わせなどもあって、スタンドを楽しませた。

天皇杯得点の争いでは、新潟県が一般女子と高校男子の部に優勝したほか、高校女子で四位、一般男子五位入賞を飾り、結局、基準得点27・5点で二年ぶり五度目の総合優勝を飾った。二位は神奈川、三位には、一般男子を除く四種目にムラなく得点した地元・和歌山県が食い込み、今後を楽しませた。新潟県には晴れの国体会長トロフィが与えられた。皇后杯得点（女子総合）は、やはり新潟がトップとなった。（詳細な記録は巻末のレコード欄に）

一般男子は神奈川
12年ぶり　山梨は決勝で敗る

一般男子は予想どおりの〝四強〟が勝ち残ったすえ、神奈川と山梨が優勝を争った。山梨はシングルスの一番手・岩下（中大出）が、意外にも簡単に渡辺に敗退したため、四連勝の夢を破られた。神奈川の優勝は34年の第14回大会以来で、実に12年ぶり。

一般女子は混戦となり、北海道が30年以来、16年ぶり三位を確保した。神奈川は杉田・味藝（旧姓高橋）のミセス・コンビががんばったが、味藝のかつてのライバルでユ杯選手・後藤の新潟に一歩及ばなかった。

〔一般男子〕（参加47）

▽三回戦　山梨2―0岩手、大阪2―0静岡、石川2―1埼玉、岐阜2―0群馬、神奈川2―0宮城、新潟2―0三重、愛知2―0富山、東京2―0北海道

▽準々決勝　山梨2―1大阪、岐阜2―1石川、神奈川2―0新潟、愛知2―0東京

▽準決勝

神奈川　2―0　愛知県

○小島　宮川　2（15―5　15―9）0　樋口　本間

○小島　2（10―15　15―8　4）0　樋口　権

山梨県　2―0　岐阜県

○窪田　秋山　2（15―15　8―11　5―11）1　森　河田

○岩下　2（8―15　8―15　0―13）1　森　棄権

▽三位決定戦

岐阜県　2―0　愛知県

○森　河田　2（17―15　14―9　11―15）1　樋口　本間

○河田　2（15―18　0―15）0　伊村

▽決勝

神奈川　2―0　山梨県

○小島　宮川　2（15―6　15―12　15―7）1　窪田　秋山

○渡辺　2（15―15　8―7）0　岩下

〔一般女子〕

▽一回戦　長崎2―1愛知、岡山3―0沖縄、神奈川3―0兵庫

▽二回戦　新潟3―0長崎、山形2―1和歌山、北海道2―1岡山、神奈川2―1香川

▽準決勝

神奈川　2―0　北海道

ミセスのコンビ（神奈川）及ばず

設備投資は町民のため

「赤字再建団体の町にとって千五十万円にのぼる町負担は大きかった。しかし〝町民のための国体〟にするには決して惜しくない投資だ」県下でただ一人の革新町長・寺西清氏はいい切る。会場の照明装置はポスト国体には青少年のために運動場に移しナイター設備に利用する。

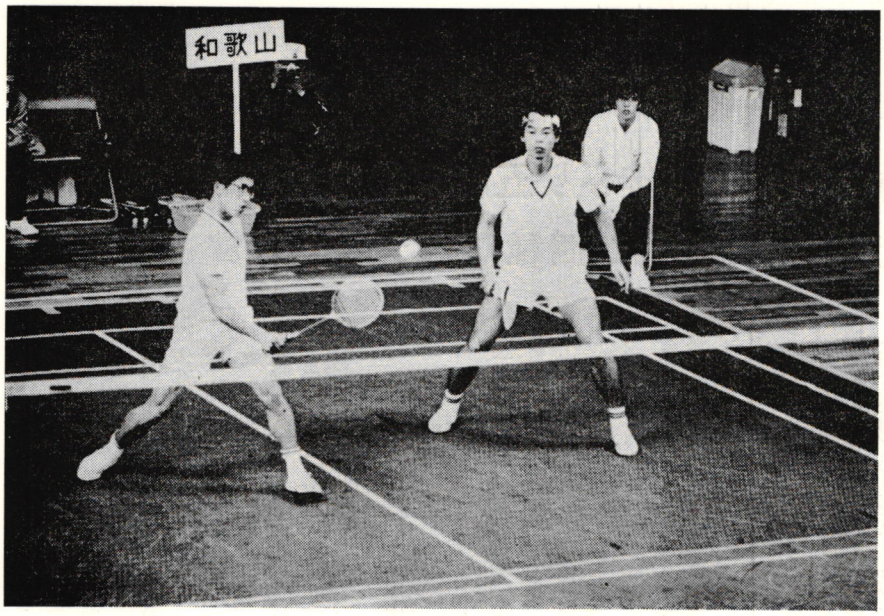
「国体はお祭りかもしれない。しかし、私たちは、祭だけに終わらせないつもりだ」出嶋次長は自信にあふれている。

それだけに、施設作りも思わぬところに苦心があった。

それは照明。町の国体関係者は会場になる湯浅中学、耐久高校の体育館内を、照度計を持って何十回となく歩きまわった。床に這って明るさを調べた。岩手国体では電球を使って失敗しているのだ。

「小さなシャトルが〝蒸発〟しないようにするには、どんな照明がいいのか。随分、考えた」（出嶋順一同町国体局次長）そして国体のバドミントン会場としては初めてという七百ワットの水銀灯、四百ワットのナトリウム灯を組み合わせて柔かく明るい光を出すことに成功した

（10月13日付け毎日新聞）



○味藝 杉田 2 (15-10 2) 0 高野 田村
○味藝 2 (11-1 2) 0 高野
新潟県 2―0 山形県
○鈴木 後藤 2 (15-5 6) 0 尾上 遠藤
○本間 2 (11-1 6) 0 遠藤

▽三位決定戦
北海道 2―1 山形県
田村 高野 0 1010-1515 2 遠藤 尾上○
○今川 2 1112 3-1011 1 岡村
○田村 2 1211-10 7 0 遠藤

▽決勝
新潟県 2―1 神奈川
○鈴木 後藤 2 1515 9-1210 15 1 杉田 味藝
本間 0 8 5-1111 2 味藝○
○後藤 2 1111-6 8 0 杉田

教員は滋賀が初優勝
―地元が二位に―

教員は滋賀が二回戦で過去五回優勝の石川、準決勝で過去二度優勝の熊本を破り初優勝。地元は二位、前年のチャンピオン岩手は四位に終わった。

〔教員男子〕（10チーム）

▽一回戦　栃木3―0香川、滋賀2―1愛知

▽二回戦　岩手2―1栃木、和歌山3―0岡山、熊本2―1北海道、滋賀3―0石川

▽準決勝
滋賀県 2―1 熊本県
○藤原 上 2 (15 12-6 12 15 1) 1 本郷 工藤
藤上 0 3 3-15 2 工藤○
○藤原 2 15 15-3 0 0 南
和歌山 2―1 岩手県
中西 佐藤 1 (15 7 6-1 15 15 2) 佐々木 佐々木○
○森 2 (15-12 9 0) 清水

○中西 2 (15 14-7-0 9 18) 1 佐々木 棄権（邦）

▽三位決定戦
熊本県 2―0 岩手県
（記録不詳）

▽決勝
滋賀県 2―0 和歌山
○藤原 上 2 (15-6 4) 0 中西 佐藤
○藤原 2 (17 15-14 2) 0 森

正強勢、準決で新潟に敗れる

高校の男子はインターハイ優勝の奈良正強・西川、佐野、中井のトリオが、準決勝で新潟に敗れる波乱があった。新潟はインターハイ個人戦でベスト4に残った土田（三条商）がよくがんばった。和歌山が強化よく決勝に進んだのも特筆される。

同女子は秋本姉妹と西尾の大阪（四条畷）が圧倒的だった。しかし、決勝では西尾についに土がついた。福島は平商の千葉・宮内コンビ（インターハイ・ベスト8）が健斗した。

〔高校男子〕（10チーム）

▽一回戦　香川3―0北海道、和歌山3―0山口

▽二回戦　奈良3―0香川、新潟3―0長崎、神奈川2―1山形、和歌山2―1三重

敬服した地元勢の進境と気力

高校男子に優勝した新潟の阿部孚監督は「日大山形と対決するつもりだったのに」と残念そうな表情。山形代表の日大山形は夏のインターハイで団体二位、シングルス二位、ダブルス優勝の強豪だが、二回戦（最初の試合）で神奈川に負けてしまった。「調整の失敗でしょうね」と、ライバルの敗退を、自分のことのように残念がっていた。

○…ついで、決勝を争った和歌山にふれ「地元の利もあり、ダブルスにもう少し磨きがかかれば、すばらしいチームになりそうだ」とほめたあと「それほど知られている選手がいないのに、あれだけ育てた指導者の手腕は大したもの。気力の点では完全に、われわれを上回っていた」と脱帽した。

○…また、最近、高校生のレベルが低下しつつあるのではないか、との質問に対しては「社会環境が変わったため」と、次のように指摘した。

「生活自体の中に、遊びの要素が多くなり、いわゆる運動やスポーツに熱中できる環境が少くなっている。

そのほかにも、公立学校のガードマン制警備、先生方の残業

国体種別得点表

府県	総合	一男	一女	教員	高男	高女
新潟	27.5	2.5	10	0	10	5
神奈川	22.0	10	7	0	5	0
和歌山	19.0	0	2.5	7	7	2.5
大阪	12.5	2.5	0	0	0	10
岡山	11.0	0	2.5	2.5	0	6
北海道	11.0	0	6	2.5	0	2.5
滋賀	10.0	0	0	10	0	0
山形	7.5	0	5	0	2.5	0
香川	7.5	0	2.5	0	2.5	2.5
福島	7.0	0	0	0	0	7
山梨	7.0	7	0	0	0	0
岐阜	6.0	6	0	0	0	0
熊本	6.0	0	0	6	0	0
奈良	6.0	0	0	0	6	0
愛知	5.0	5	0	0	0	0
岩手	5.0	0	0	5	0	0
石川	5.0	2.5	0	2.5	0	0
長崎	5.0	0	2.5	0	2.5	0
東京	2.5	2.5	0	0	0	0
栃木	2.5	0	0	2.5	0	0
三重	2.5	0	0	0	2.5	0
千葉	2.5	0	0	0	0	2.5

▽準決勝
和歌山 2—0 神奈川
○山本 2(15—10 5)0 折井
倉内 2(15—5 8)0 小林
○山本 2(15—10 5)0 折井
新潟県 2—0 奈良県
○土田 2(15—4 4)0 西川
鈴木 2(15—4 4)0 佐野
○土田 2(15—5 7)0 中井

▽三位決定戦
奈良県 2—0 神奈川
○西川 2(15 18—9 14 15)1 折井
佐野 2(15 18—9 14 15)1 小林

▽決勝
新潟県 2—0 和歌山
○土田 2(15—12 11)0 山本
鈴木 2(17 15—14 12)0 山本
○西川 2(15 18—2 14)0 折井

〔高校女子〕

▽一回戦 千葉2—1岐阜、福島2—1長崎

▽二回戦 大阪3—0千葉、新潟3—0北海道、岡山3—0和歌山、福島2—1香川

▽準決勝
福島県 2—1 岡山県
○千葉 2(15—5 10)0 林
宮内 2(15—5 10)0 平田
千葉 1(5 11—11 8 12)2 林○
○宮内 2(11—3 5)0 平田
大阪府 2—0 新潟県
○秋本八 2(15—2 1)0 海老名
西尾 2(15—2 1)0 長谷川
○秋本幸 2(11 11—3 8)0 佐久間

▽三位決定戦
岡山県 2—0 新潟県
○林 2(15 3 15—6 15 11)1 海老名
平田 2(15 3 15—6 15 11)1 長谷川
○平田 2(11—7 2)0 佐久間

▽決勝
大阪府 2—1 福島県
○西尾 2(15 18—7 16)0 千葉
秋本八 2(15 18—7 16)0 宮内
西尾 1(6 6—11 11 4)2 千葉○
○秋本八 2(11—3 2)0 宮内

沖縄女子選手とのミニ・ミニ・インタビュー

——練習はふだん、どのくらいやっていますか。

「体育館が少く、コートがなかなか使えないので、週に一回ぐらい。でも、国体前には、週五日ぐらい強化練習がやれた」

——競技人口や用具は

「用具は一応そろっている。でもネットなど、石を置いてオモリにして張ったりしているところもある。高校は10チームぐらいあるが、一般はとても少い。二年後の〝沖縄特別国体〟に対する一般の人々の関心はまだ低いようだ」

——参加して勉強になった？

「高校生以外はほとんど自分たちだけでやっているので、とても勉強になった。とくにフットワークとスピードがちがうと思った。私たちは余分なところに力を入れすぎているようで」

が行われにくい、などで、公立でのスポーツ活動には限界がある。かといって、必ずしも私立によい指導者がいるともいえない。

卒業生で故郷へ帰らぬものも多い（上京）から、先輩にめんどうみてもらうことも、しだいにむずかしくなっている」

問題残した一流選手のマナー

〈国体に拾う２つの出来ごと〉

湯浅町

バドミントン会場の湯浅町は和歌山市から国鉄で南へ約一時間ほど下ったところ。毛無、苅藻、鷹島、黒島などの島々が点在する眺めのよい湯浅湾をかかえ、関西地方随一の釣船基地として、マニアに知られた、人口約一万七千余の半農半漁の町である。

一方〝有田みかん〟の商標でなじみ深いみかん、金山寺味噌、しょうゆの産地としても有名。古くは裏山に築かれた湯浅城の城下町として栄えたといわれ往時をしのばせる町なみのたたずまいがみられ、国体だからと、ことさら飾りたてぬところに好印象を受けた。

いきなり〝バカやろう〟と

いきなり「バカやろう！」

一瞬、場内は水を打ったように静まりかえった。

国体最終日、第一会場の一般男子決勝。サイドを襲った打球を、その選手はアウトと判断、選球した。ところが、線審（地元の女子高校生）は〝イン〟とジャッジしたのである。

判定の当否は、このさい別問題である。選手が審判に対してバカやろう呼ばわりとは、一体なにごとであるか。その選手はファンならだれでも知っている一流プレーヤー。

しんとしたスタンドは、やがて、ざわめきに変っていった。それはミス・ジャッジ（？）を非難する声ではなく、自分たちの身内である地元女子高生への同情と「あの選手が、あんなことをいうとは」という、驚きの声だった。

ある選手は「あんな場合、やむを得ないですよ。つい、口に出ちゃいますよ」と、このシーンを弁護した。確かに、もののはずみということもあるだろう。しかし「つい」でことはすむだろうか。

この日に備え、数カ月も前から〝国体バドミントン競技・競技役員補助員〟という名のもとに、訓練と努力を重ねてきたあげく、満座の中で恥辱を与えられた、女子高校生の立ち場（たとえ、ミス・ジャッジであったとしても）は、どうなるのか。

また、このシーンをじっと見つめていた、数十人の小中学生に、このような場面を、どう説明したらよいだろうか。自分たちのあこがれのマト、英雄と思っていた選手が「こんなひどいことをいうとは」と、おそらくバドミントンの世界そのものにも失望したにちがいない。

後日、この事件について、日本協会の某役員は「すかさず主審が選手を呼びつけ、その女子高校生が怒鳴られたと同じくらいの声で、たしなめるべきだった」といっていた。

なるほど、と思うと同時に、同じ山梨×神奈川のカード中、もっと大事な場面で、これは明らかにミスとわかる判定を宣告されながら「ええっ」とひとこといっただけで、にっこり笑ってプレーを続行した秋山真男選手のマナーが頭に浮かび、これまた強く心に焼きついたのである。

×

もう一つ。一般男子準々決勝東京×愛知の主審をつとめた日本協会の遠井指導委員長、本部席へ戻ってくるなり「あいつの試合態度は、いったいなんだい。あきれて、ものもいえんよ」と憤慨していた。

話を聞くと、このカードの試合中、第一ゲームを先取した愛知の某選手、第二ゲームにはいると、足がけいれんを起こしたため、ゲームを放棄し、第三ゲ

審判と選手の関係は、このようになごやかにありたいもの▼



ームをやらせてほしいと申し出たそうだ。

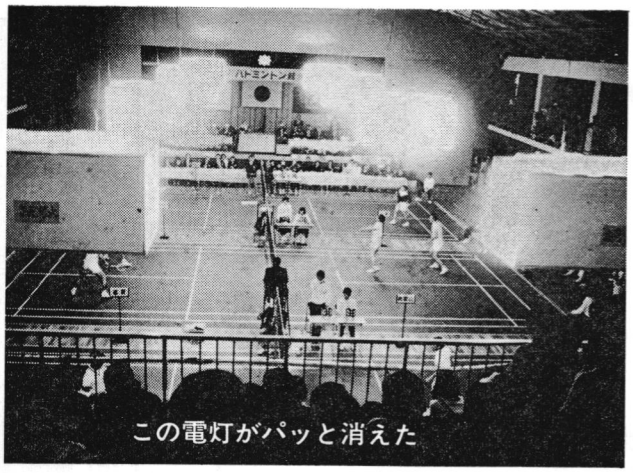
要するに第二ゲームは棄権負けにして、第一、第三ゲームを勝てばよいというハラ。主審もちろんこれを却下「第二ゲームを棄権すれば、ファイナルも棄権負けになる」と申し渡した。するとこの選手「それじゃあ、やります」といった、という。

これでは遠井先生もカチンとくるのは当たり前だ。

×

さて、この二つの事件、この誌上にあえて取り上げたのは、誌者や関係者とともに、スポーツのあり方を考えたいと思ったからだ。すでに当人は反省しているはずなので、情状をくんで実名をさけたのだが——。

スポーツにはルールがある。ルールに記されていないことは〝紳士〟として判断する。マナーは選手が常識ある社会人であるかどうかの基準なのである。



〝史上初〟づくめの——珍事あいついだ大会

この黒潮国体には国体史上初めてというニュースがいくつかあった。

そこで、その中の二、三を紹介しよう。

〈ミニ・ミニ会場〉

今回は会場がふたつに分かれた。以前、埼玉国体の際にも二会場で行なわれたことはあるがその時は主会場と第二会場は隣りあわせだったので、二会場が完全分離したのは今回が初めて

第一会場の湯浅中学体育館と第二会場の耐久高校体育館の間は約二百メートル。両会場を結ぶ幹線（？）道路は簡易舗装された幅二メートル足らずの田のあぜみち。

このため第二会場で勝ち残ると次の試合は第一会場へ引越しという姿も随所にみられ、選手たちもタイムテーブルと首っぴきで、だいぶとまどっていたようだ。

また両会場とも、ふつうの正課体育用の体育館のため、三コートを設置するのがぎりぎりの〝ミニ会場〟スタンドもこのため二百名ぐらいしか収容することができず、多くの人々に観戦の機会を与えられなかったのは残念なことだった。

〈ミセス・ペアの登場〉

ちまたに、ママさんバドミントン・クラブ設置のニュースが流れる昨今、これまた国体史上初のママさんペアが登場し注目を集めた。

とはいっても彼女達、人も知る杉田良子・味蓼とも子（旧姓高橋）の神奈川代表。それぞれ社会人大会やユーバー杯代表として活躍している現役プレーヤーだけに、俗にいうママさん選手とは呼べないかも知れないがそれでもミセスとして出場を実現したことは、バドミントンの幅の拡がりを感じさせ、歓迎すべきニュースであり、今後ますますこういった傾向が強くなるだろう。

〈突然、まっくらやみ〉

第二日目の午前、第一会場では一般男子二回戦が白熱のうちに行われていたが、突然、会場内がまっくらやみとなった。おりから第二コートの主審をしていた日本協会副競技委員長の岡村英男氏、すかさず大音声で「タイム！」と宣告したため、さしたる混乱もなく、競技は約三十分後に再開された。原因は電源の故障（？）起ったものらしい。

〈四日間に三つの火事さわぎ〉

まず第一番目の火事は我々が湯浅に到着する前夜（二十二日の晩）に起り、おりから先着していた岩手県チームの近隣であったため、岩手代表の面々が消火・救援活動を手伝い、地元湯浅町より感謝された。このニュースはさっそく翌朝の新聞に写真入りで報道された。

第二番目の火事は二十四日の明け方近くに起った。

ぐっすり寝込んでいた我々は突然けたたましいサイレンの音に飛び起き、一瞬、なにごとか？とようすをうかがった（ほんとか）

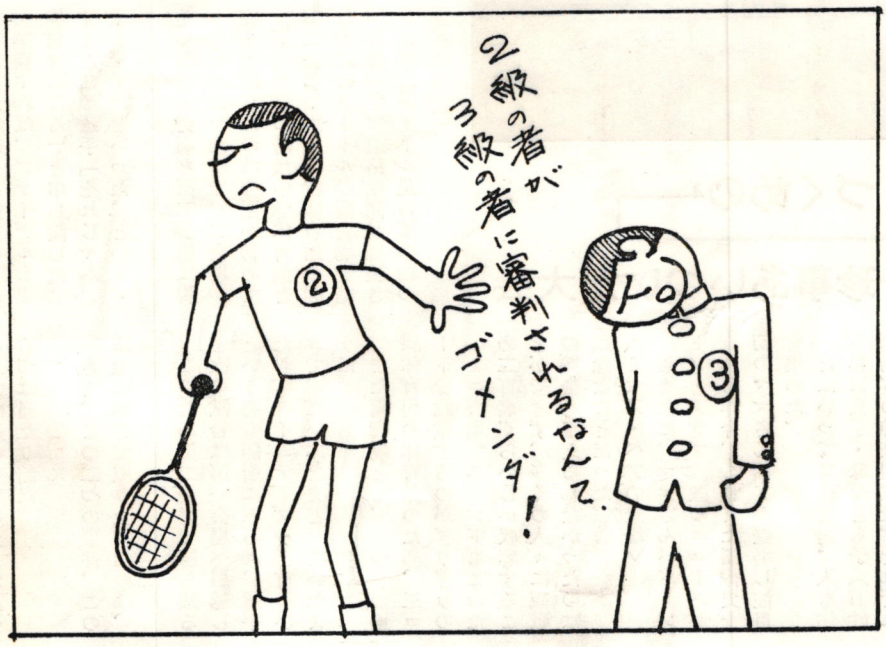
そのサイレンは市役所の屋上に備えられたスピーカーから、町中に聞こえるほどの大きさで鳴り響いているのだった。都会育ちの我々には、火事というと消防車のサイレンの音しか耳にしたことがないために、聞きなれないこのうなりが何を意味するものかわからず不安がさき立ったが、宿の仲居さんに火事と聞かされ、そして離れた所と聞き、ほっとタメ息。

三番目は二十五日の午後四時頃、これまたけたたましいサイレンが鳴り響き、前夜ほどではなかったが、本部宿舎では連日続く火事さわぎに驚きと不安が入りまじり、役員の中には「今夜から荷物をしっかりまとめて、いつでも飛び出せる態勢でいないとアカン」と本気で心配する者もいたほどだった。

（秦浩）

「おれは２級だぞ!!」
「―お前の審判なんか，ごめんだ」

ばどみんとん昔むかし
〈連載 第2回〉ふたたび 珍談の巻



〈ばどみんとん昔むかし〉第一回はいかがでしたか。

歴史はありがたいもの、そのときは、怒り心頭に発するような大事件でも、時がたてば「今だから話せる」笑い話になる。

今回もそんな舞台からストーリーがはじまる。全国のみなさん、ご存知よりの旧い話を、どうぞ編集部まで――

岩手県協会副会長
八木橋伸夫

公認審判員制度が出来初めのころの話。四国の善通寺市で開かれた国体に、審判をたのまれて、はるばる盛岡から、はせ参じた。

●審判拒否事件

公認審判員が、まだ少いときだから、全国から、かき集めて一応、開催基準を守る必要があった。東北大会などでは、ブロック審判団として、各県から公認者を出し合う慣習が永く定着している。

さて、四国では、新潟の市島先生とコンビで、正副を交互に勤めた。そのご縁で、今でも大会場でお会いすれば、懐しさをおぼえる。

ある年の東北大会のとき。選手が審判の相続く誤審にゴウをにやし、とうとう、審判拒否の申し立てがなされた。若い審判員だったが、彼は自分のミスを認めようとしなかった。私から見れば、審判技術の未熟さは、覆いようもなかった。

そのとき、選手いわく「きみは何級公認か?」答えて「三級です」そこで選手は誇らかに、「オレは二級だ。誤審だらけの三級に審判してもらいたくない」――というようなわけで、審判長への申し立てが行なわれたしだい。

ところが、当時、東北でも一級は四、五人しかおらず、それに選手兼任の人ばかり。主催県の審判長も二級であった。

結局、手のあいているもの。ということで、私が交替審判になった。爾来数年、どこの県で開かれる大会でも、例の選手の試合は、暗黙のうちに、私に審判が回ってくることになった。

●鶏供養事件

ある年の大会では、試合開始に先き立ち、鶏（ニワトリ）供養が行なわれた。陸鳥オンリーの時代、水鳥球など、見たこともなかった。シャトルはニワト

リの羽根で作るもの、と思っていたくらいである。

フロアの一隅に設（しつ）らえられた祭檀には、新旧のシャトルが山と積まれていた。

司会の指名するままに、各県代表が恭々しく祭檀に進み、ニワトリの霊を慰め、かつ、感謝の念を捧げたものである。

ところが、これは、式が進むに従って、真面目なものではなく、主催県理事長のアイデアが生んだ、コミックな演出だと、わかってきた。

事前打ち合わせは、まったくなかったものの、各県理事長の式辞とも弔辞とも、祝詞（のりと）ともつかぬ、デタラメな文句に、会場は抱腹絶倒したのであった。私も止むを得ず敬けんな拝礼を行ない、やおら般若心経（はんにゃしんきょう）とキリストの主の祈りを交えた、即興の祭文（？）を捧げた。

●鉛入りシャトル

シャトルについては、終戦直後のオールド選手には、その入手や補修に共通の想い出がある。生きたニワトリの羽根を抜いて怒られたり、羽根の植え付けに苦労したりの経験は、たいがいの方が持っている。

私が始めたころ（昭和23年）には、英国型と米国型の屋内球、それに小型の屋外球というものがあった。

鉛のおもりを入れた、やや大きな屋外球が出回ったのは、それより少しあとのように思う。

この小型の屋外球は風にも強く、屋内体育館の少ない当時のこととて、私などはこれを愛用した。

元来、硬式テニスをやっていたし、冬場のトレーニングぐらいのつもりでバドと取り組んだ私にとって、この羽根の短い、飛翔速度の速いシャトルは、テニスの打法で、すぐなれたし、好感が持てた。

その後、比較的、飛翔速度と距離の劣るものが、一般に好まれるようになり、バド特有の技術も発達普及し、当初のテニス出身者が脱落していった。前回触れた全日本チャンピオン岡淳一氏なども、たしか硬庭出身と聞いている。

大阪1月28日、東京30日
デンマーク女子招待日程

デンマーク女子を招待して行なわれる第一回国際女子バドミントン競技大会のメンバーと日程が決まった。

来日選手はウラ・ストランド、カーリン・ジョーゲンセン、リーン・コーペン、アン・ベルクントの四人で、いずれも全デンマーク、全英選手権等で活躍しているトップ級。日本協会の広報関係者によれば「プロポーションも抜群」だとのこと。

大会日程は別記のとおりで三試合。日本側からはユーバー杯の代表候補グループ（高木、湯木、相沢、竹中、高坂、柴山、高崎、石崎）に高校生の西尾・秋本姉（四条畷学園高）が出場するが、具体的な試合方式は未定。

東京と横浜の大会は東京12チャンネルからテレビ放映される。また、読売新聞が後援する。

▽**大阪大会**　1月28日（午後3時半・大阪中央体育館）

▽**東京大会**　1月30日（午後2時・代々木第二体育館）

▽**横浜大会**　2月2日（午後6時・横浜公園体育館）

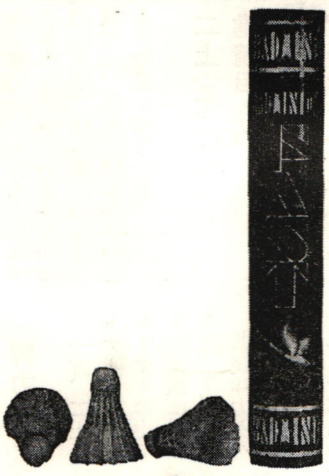
☆　☆

☆　☆

水鳥　検定合格球

ファストゴールド

ファストシルバー



ファスト印シャトルコック製造発売元　有限会社　ジャワ商会

山形市六日町7 28

電話 02362（22）3994(代) 3280・0545

プをさぐる

栄光のテープを切るのはだれか

次代を背負う若人たち――トマ杯、ユ杯をめざし、近い将来のチャンピオンを夢みて、シャトルを追い、ラケットを振るプレーヤーの数は多い。

その中で、だれがいち早く栄光のゴールへたどりつくだろうか。プレーヤーの宝庫である学生界の中から、注目される人材をピックアップしてみた。今回は、まず男子を――。

桐竹　賢
（全日本学連委員長）

トップに遠藤（日大）
関東、東日本ともに制覇

まず、遠藤（好）＝日大、日大山形高＝は昨年の新人戦、今年の関東選手権、東日本と、いずれもシングルスで優勝を獲得した。さらに東日本では法大、日体大等の強豪の欠場はあったが、ダブルスのタイトル（パートナー牧野）もとった。

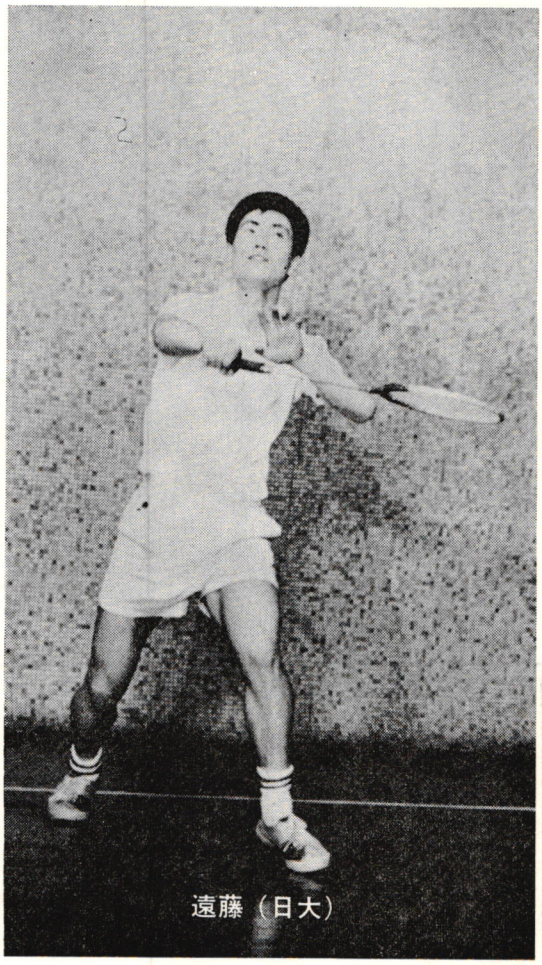
これらの成績は、日ごろの練習好きからもうなずけるが、また勝負度胸や試合に対する自信でも、他の選手を寄せつけないものがある。

スコアからもわかるように、昨年の新人戦、今年の関東選手権決勝では、いずれも二上（早大）を破り（15―3、15―7と15―13、1―15、15―9）東日本では谷口（立大）を18―13、15―8とストレートでくだし、ますます、その充実感を確かなものにしていった。

また、リーグ戦では、春季がシングルス無敗、秋季は鷲尾（中大）に4―15、1―15という不可解な1敗を喫した以外は安定した成績をあげている。スタミナには相当の自信を持っているので、今後、力強いプレーを身につけ〝うまさ・プラス・スケールの拡大〟が約束されれば面白いだろう。

かつて、インターハイで遠藤と王座を競った二上は、どうだろうか。

個人戦では、いつも上位にランクされながら、いまひとつの実力に欠け、団体戦であるリーグ戦では、取りこぼしが多いというウキ目をみていた。


遠藤（日大）

二上（早）にも進境目立つ

今春のリーグでも、大事なところで星を落し、浜谷（法大）には10―15、15―11、16―17、牛渡（日体大）との対戦では14―17、8―15と、いま一歩の粘りに欠ける点があった。

しかし、昨年度の新人戦では好敵手・遠藤に全く歯が立たなかったのに、今度の関東選手権では、ゲーム・オールの熱戦でスタンドを魅了するまでに成長した。

各校エースを連破

また秋のリーグでも、これまでになく自信あふれるプレーぶりが目をひき、遠藤を除く各校のトップ、法大・笠井、中大・鷲尾、青学・笠井、日体大・木戸を連破した。

日ごろのまじめな練習態度、本人のいう「一歩、一歩の着実な進歩」が、ここに開花したといってよい。

脚力光る今井（早）

一方、二上のダブルスのパートナー今井は、今季の四年生プレーヤーの中で一人、気を吐きリーグ戦は春5勝0敗、秋4勝1敗。主将の重責を果たした。

基礎体力を必要とするバドミントンで、ランニングは欠かせないトレーニングだが、今井はこれまで部内の一、二位をいつ

次代のトッ

≪学生界(男子)の巻≫

主将となった今季、その奮闘が期待されながら、春のリーグは単で1勝しただけ。続く関東選手権でも、ベスト16入りで草島（法大）にストレートで敗退

鷲尾（中）もカムバック
群を抜く草島・田所組

秋のリーグでカムバックして遠藤を破り、その後は長身尾崎と組んだダブルスでも、よい成績を残した。卒業後も、個性的なプレーで、ファンを楽しませてほしいものだ。

日体大のダブルス門間・木戸はどうか。昨年のインカレと全日本総合で三位の好成績を残し、その余韻さめやらぬまま、春のリーグで5連勝。

個人戦も大いに期待されたが教育実習等と重なり、出場できず、そのブランクが秋までひびいたようだ。

ダブルスでは、やはり草島・田所組（法大）が名実ともにNO1にのし上がった。

昨年度の新人戦から負け知らず、向うところ敵なしといった感じである。一年でいきなり新人戦に優勝、周囲をあっと驚かし、二年でも同様に優勝、連続新人王という快挙をたしとげた。今シーズンも春のリーグで全勝、法大に二シーズンぶりの優勝をもたらした。その功績は讃めたたえられる。

関東選手権でも苦戦はあったが、持ち前の粘りと実力で優勝杯を手にした。秋にはいってもさらに充実、リーグ戦全勝と全く安定した力を示して、群を抜いた活躍ぶりである。

二番手に小泉組（中）

二人とも根はまじめだが、プレー中は、妙を得たことば、しぐさなどで観客をわかせ、緊迫した試合のうちにも、リラックス・ムードをつくり出す人気ペアでもある。

ダブルスのプレーをよく知っており、これに今後、パワーやシャープさが加われば、学生界といわず、全日本でもトップレベルを維持できるのではなかろうか。

まだ実力差はあるが、このダブルスに対抗する若手組は、中大の尾崎・小泉組だろう。大型ダブルスとして興味がもたれたこのペア、昨年度の新人戦では0—2と草島・田所組に敗れ、二位だった。

それに一年生から東西対抗競技代表に選ばれ、今年も連続出場の栄誉を与えられ、次代を担う選手と期待された。

しかし、関東選手権で遠藤・村谷組（日大）にストレート負けを喫したり、東日本大会でも牧野・遠藤組（日大）に接戦のすえ敗れ、二位に甘んじてしまった。

それが尾をひいたかどうか、秋のリーグ戦から組み替えされたのはさびしい感じがしないでもない。

からだが大きいせいか、スピード感がなく、ダブルス・プレーの大切な要素の一つが欠けるが、それをカバーするためにも長身を生かした、角度あるスマッシュ等で成長してほしいものである。

大型・尾崎は低迷ぎみ

尾崎のシングルスはどうであろうか。

彼の特徴？　は、取りこぼしが多く、昨年度新人戦ベスト16、関東選手権ベスト32と、ふがいない成績に終わり、実力を発揮しきれずに低迷している。

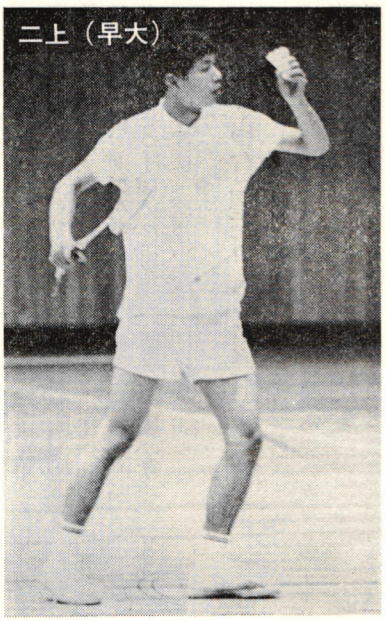
秋のリーグでは今井（早大）笠井（法大）等を破ってはいるが、反面、伏兵・九原（日大）に負けるなど、アンバランスな点が目につく。

特ち味である、ジャンプしての角度あるスマッシュや、フェイントをかけたカット、クリヤーなどの冴えが落ちることは、彼にとって致命的。

も後輩の二上とせり合っていた。スタミナの点ではヒケをとらぬ選手だが、関東選手権ではライバル遠藤にファイナルで敗れ、惜しくも三位にとどまった。

ダブルスに、もう少しピリッとしたところが欲しいが、本質的には、シングルス・プレーヤーではなかろうか。

同じ四年生の鷲尾（中大）は以前、学生界NO1の本間（現トヨタ自工）とダブルスを組んでいたため、とかく、そのカゲが薄かった。


二上（早大）

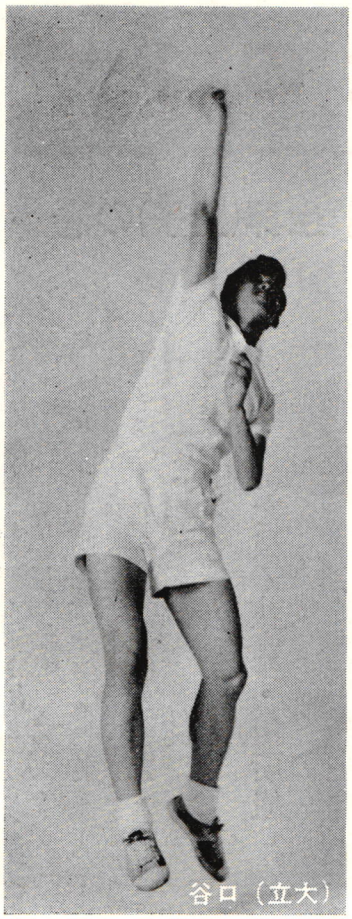
もうひとつ、着実に実力をつけているダブルスのペアがいる。青学大の主力、笠井・大和田組である。

一部リーグ昇格の重責を果たした笠井は、法大の笠井と同じ静岡県立富士高出身で、そのプレーは高校時代から〝剛と柔〟と対照的だった。

このダブルスが印象深かったのは、関連選手権の準々決勝で優勝ペア草島・田所と大接戦（15―12、6―15、15―18）を演じ、観客を最後まで釘づけしダブルスの面白さを十二分に見せてくれたことである。

ただ、秋季リーグで再度、対戦したときに見られたように、攻めのパターンに単調さが残っている。いまひとつの工夫が欲しいものである。

ところで、一時、最有望新人といわれた谷口（立大）はどうか。


谷口（立大）

谷口、インカレ優勝で面目
関西で気を吐く植田（近大）

一年のときの新人戦では期待どおり、滝野（法大）を破り優勝を収めたが、その後、アジア大会出場など、いくつかのチャンスを与えられたにもかかわらず、良い成績があげられず、今期の関東選手権ではベスト8入りで二上に対戦したさい、足のけいれんで棄権負けを余儀なくされた。

長身からくり出す、彼のスピードあるスマッシュも、東日本大会ではレシーブ力抜群の遠藤の前に、効果を充分に発揮できずに終わった。しかし、全日本学生で、ついに金的を射止めたのはめでたい。まだ、のび悩みの感がうかがえるが、プレーに対する真面目さ、練習熱心な態度には好感がもて、今後は精神力の充実と、練習相手の不足を克服することが課題だろう。

ここで関西に目を移すと、一人、安定性のあるプレーヤーがいる。近畿大四年生で主将・植田である。

関西では最も充実しており、安心して見ていられる選手、と定評があり、実生活の面でも「練習熱心で、試合前になると酒もタバコも口にせず、節制を心がけ、常にコンディションを最高に持っていき、試合に臨む態度は好感がもてる」と、関西学連関係者はいっている。

事実、戦績からもそれが立証されている。

たとえば、秋季リーグ戦では単・複（パートナー岩田）でともに5勝無敗。関西選手権では決勝で阪本（関大）を15―7、15―6とストレートに破り、西日本大会では団体戦優勝の立て役者となったほか、個人戦の単決勝で小林（関大）に15―5、15―2と圧勝、ダブルスも他をまったく寄せつけなかった。

さらに昨年度は東西対抗では谷口（立大）をくだし、西軍ただ一つの白星をあげた。もっとも、この圧倒的強さのカゲには植田につぐ選手がいないという関西勢の層の薄さがある。

銭谷ら有望新人も輩出

このあたりで、これからの学生界を背負う有望新人をピックアップしてみよう。

まず中大の銭谷。上背のある彼は、先輩の尾崎と多少、似かよったプレーをする。

関東選手権、東日本大会と順調にコマを進め、秋のリーグ戦では通算3勝1敗と、新人の中では好成績を残している。シングルスでは試合ごとに安定度を増してきているし、これからは楽しみである。

つぎに、日大の飯野（三条商高出）。昨年のインターハイで8入りし、春季リーグの単では今井（日体大）をくだして初の白星をあげた。

個人戦では田所、谷口という強敵と当たり敗退したが、秋季リーグでは成長の色を見せ、着実にポイントをとっていった。

同期の銭谷との初の対決では敗れはしたが桐生（日体大）斎藤（法大）らに勝ち、4勝1敗と立派な成績を残した。

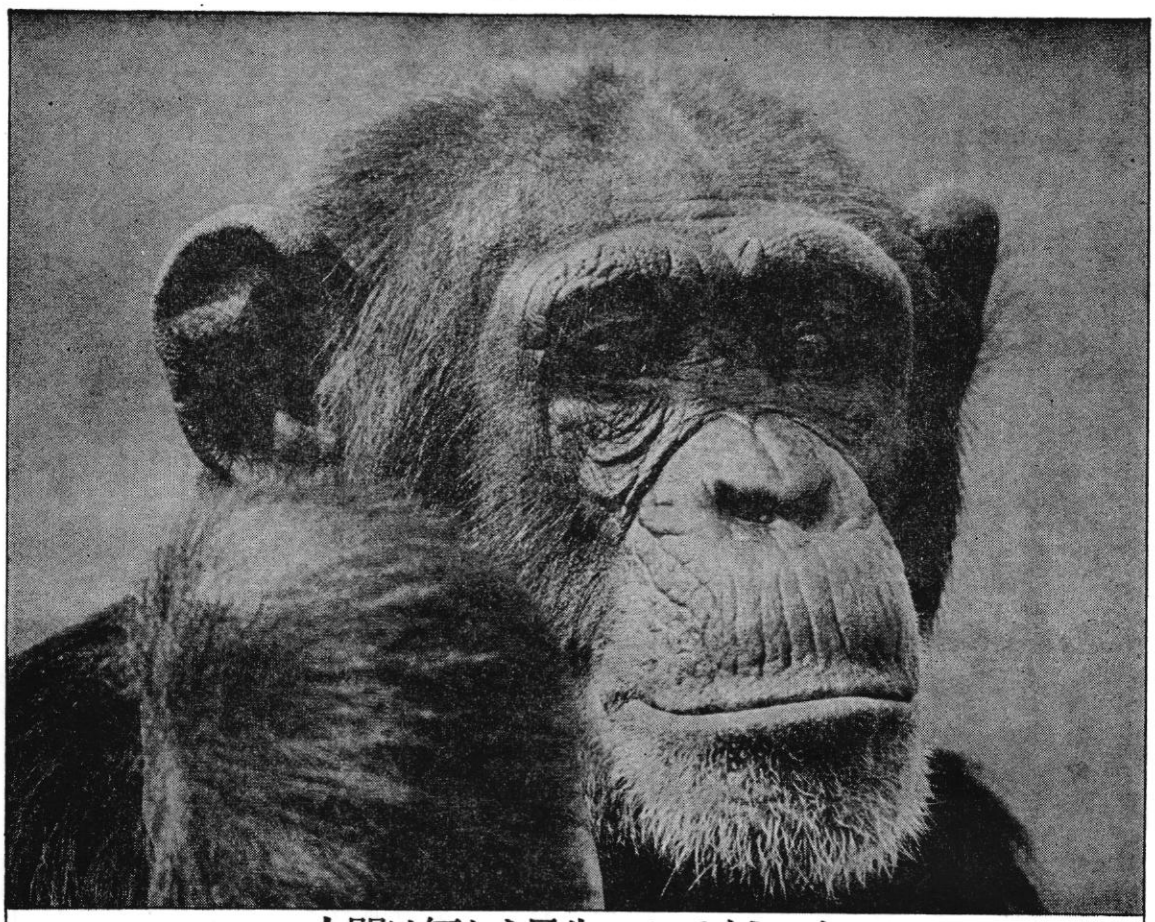
切れ味の鋭いカットやリターンのよさに、パワーがプラスされれば、日大にとっても心強い兵力となるだろう。

最後に法大の巽。リーグ戦では岡田と組んでダブルスで出場したが、やはり〝ダブルス王国・法大〟で鍛えられているせいか、うまさが感じられる。

今後、場数を踏み、難点である小柄な点をスピード等で補い先輩に〝追いつけ、追い越せ〟の精神で努力を重ねてもらいたいものである。

もちろん、ここにあげた選手たちのほかに、まだまだ多くの有望新人がいると思うが、一日一日の積み重ねの大切さを自覚し、近い将来の学生界のみならず、バドミントン界全体を背負って立つプレーヤーに成長してほしいものである。

（次号は女子学生の巻）



人間は何かを見失っているようです

スコーレ

●scholeギリシャ語●leisure(余暇)rest(休息)ease(ゆったり)の同意語school(学問)の語源—岩波哲学辞典より
●古代ギリシャ人はスコーレをすべての文化の根源と考えていた●スコーレは最も人間的な時間人間的な生活

人間も都市も砂漠化している現代

あなたにとって幸福とは、いったい何でしょう。GNP世界第2位の裕福さでしょうか。ヒッピーたちのもっている、あの自由な精神がそうでしょうか。この索漠とした現代、とにかく考えさせられます。

豊かで、しかも人間らしい生活を

スコーレとは、物質文明と精神文明の調和。つまり、豊かな人間社会のための環境づくりと豊かな人間生活のための物づくりにあります。テイジンが拡大していく、豊かでしかも人間性を尊重した世界です。

人間を愛し
人間を考え
人間に帰ろう
スコーレ
テイジン
TEIJIN 帝人株式会社

●スコーレを拡大するテイジン

天然資源開発　アフリカや南北アメリカで低硫黄石油を開発中。日本のエネルギー資源確保のため
石油化学事業　世界中の合繊生産に貢献。ポリエステルをはじめ、各種の合繊用原料の生産と輸出
合成繊維事業　豊かな生活環境、新しい生活行動パターンの創造。ファッションから産業資材まで
海外事業　人類の衣生活充実。世界10余カ国へ進出。ポリエステルなどの生産技術で各国に協力
情報産業　知識社会・情報社会の拡大。ビデオ、X線、コンピューターのベースフィルムを生産
プラスチック事業　未来の生活を支えるエンジニアリング・プラスチックや汎用プラスチックの開発と生産
食品事業　健康社会の推進。理想的な食生活のための食品づくり。牛肉エキス、植物蛋白など
住宅関連事業　人間性を尊重した住宅空間、創造的な空間の建設。ハウジングからレジャー分野まで

●中高校編

見て、聞いて、胸を借りて

――他人から積極的に学ぼう

日本協会競技力向上委員　佐藤茂雄

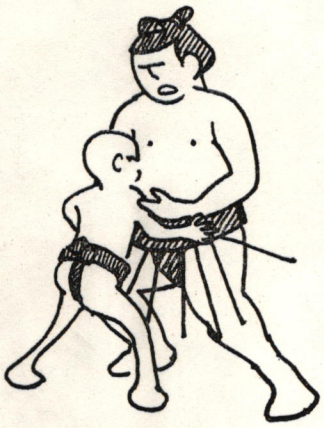
中・高校生段階では、技術面はもちろんのこと、精神面においても非常に不安定である。

体格だけは一見、大人であるが、精神的には非常にモロイ年代である。大学生や社会人になれば、自主・自覚の精神が旺盛になり、技術的にも安定度を増して来るものである。

中・高校生時代、各種大会でたとえ好成績をあげても、それは概して監督の〝リモコン〟またはコーチの影響力が大なるためであり、かつ、大体において指導者がベンチにおられるためうまくムードに乗って勝利を得る場合が非常に多いものである。

換言すれば、先生や指導者がすぐそばにおられなければ、一体どうなるだろうか？

――はたして好成績をあげるにふさわしい十分なる力量を、発揮できただろうか？



自分はロボットになっていなかっただろうか。リードされると先生やコーチの顔色をうかがい、指導をあおぐ〝他力本願〟的な気持はなかったか？

自分のバドミントンができただろうか？

技術的に上達するためには、猛練習の繰返しを行なうことは言を待たないが、見ることにより、上達する点も忘れてはならない。

すなわち、強い選手の練習状態やゲームを見せてもらったり近くで大きな大会が開かれるような場合は、観戦に行ったりして、どこが、どういうぐあいに異っているか？　フット・ワーク、打点、タイミング、追い込まれた場合の処理の仕方……等々、よく見極めることが大切である。

いくら、理論的にうまくコーチを受けても、実際と合致しなければ意味がない。よい見本をよく見ることにより、自分の未熟な個所や疑問が解消されるものである。

もちろん、一度や二度見るくらいで、一気に上達するものでもない。ひとつ解消し得たとしても、次から次へと、また新しい疑問点が湧いてくるものである。

強い選手の練習を、試合を、何度も何度も見ることは、やはり技術向上の大きなカギであろう。

しかし、見て、頭の中では理解していても、いざ、練習となれば、どうもうまくゆかない――そのような時には、勇気をおこして実際に、その選手に教えを乞えばよい。練習の成果が目立って向上するものである。

見て、聞いて上達する。

さらには、よい選手が近くにおれば、なんら、ためらうことなく胸を借りればよい。

一流選手に胸を借りただけでものすごく強くなった感じがするものであり、いや、自分達だけが、あるいは自分だけが〈打ってもらった〉という優越感と誇りで、本当に強くなるものである。

見て、聞いて、胸を借りて――小さなカラの中での成績を喜び、外部に強い選手がたくさんいるのにもかかわらず、テング然としたり〝お山の大将〟をきめこむのは、選手達にとって、実に大きなマイナスであり、より前進することをはばむものである。

見ること――百パーセントプラスにならずとも、何パーセントかのプラスを発見できれば、練習の一日や二日ぐらい棒に振ったところで、実に意義深いことだと思う。

最初から強い選手やチームはあり得ないのだし、だれでもが教えられて、強くなってゆくのが実状である。現状でことたれりでは、進歩向上は望むべくもない。常に視界を広く外へ向けることが、非常に大切である。

また一流選手は、人並み以上に苦労をしているものである。辛さ、悲しみ、悩み、みじめさ等も人一倍、味わっている。

人一倍そのような経験が多いからこそ、成績もまた人一倍なのである。一般的な考えで一般的な練習では、生れてくる答えも当然、月並みでしかない。

技術、精神両面にわたって行きづまりを覚えたりしたならばそのような一流選手に、過去の苦労話を聞くのも、大いにプラスになること必定である。

自分の気力、自分につごうのよい安易なる妥協、中途はんぱな技術への満足感……なるものの甘さが、一度にぬぐい去られ少々の悩みは瞬間に解消されること間違いなかろう。

逆にいえば、自分の小ささを改めて知ることにもなる。

（東大阪短大監督）

〈シングルス・ゲームの作戦〉

その一　ホーム・ポジションの前進

基本が生んだ高等戦術

ハルトノの基地、50センチも前に

より高く、より速く……徹底したネット利用

バドミントンで、もし、両エンドの間にネットという網が張ってなかったらどういうことになるだろう。恐らく、テニス、バレー、卓球と同様、バドミントンは一朝にして姿を消すだろう。と一九六〇年のあるバド関係の雑誌にこんなことを書かせていただいた記憶がある。

ネットという障壁があり、コートの広さに制限があるからこそ、バドミントンに面白さがあり、技術も、力も、かけひきも生きてくるというものである。

自分にとっては、ネットはあまり邪魔にならず、むしろ守備を手伝ってくれるものであり、相手方には、なるべくネットが邪魔になる状態をつくるようにバード・フライトを捕え、コースやスピードをコントロールできるようになることが、大きい目標となってくることは理の当然といわねばならない。

『少しでも高いところで、少しでも前でバードを捕えよ』と私が力説しつづける理由がここにある。

この力には深さと厚味がある。現在、日本のトップにあると思われる何人かの選手諸君はこの点には早くから留意して、その脚力において、そのアンテトノの実力を私は想い起しつづけている。ハルトノのホーム・ポジションは小島君や秋山君より、約五十センチほど、前方にあったと私は計測している。

彼のフット・ワークにはいわゆるばたつきは全然、見られなかった。小島君や秋山君にドロップされて、前におよぐ姿も見られなかった。

小島君や秋山君の鋭い捨て身のクリヤーとかスマッシュに対しては、案外に態勢のくずれを見せることもあったが、しかしきものがあったのである。

そうして、ずいぶん追い込まれたな、という態勢になっても、決して逃げるためだけの、安全オンリーの甘いリターンを見せなかった。恐らく、彼はどの試合においてもこういう戦いぶりをするのだろう。

素質もさることながら、前で勝負するのだ、ネットを邪魔にしないで、これを徹底的に利用するのだ、という基本的理念がその根底にあるのではないか。

ところで、この態勢は一朝にしてできるものでなく、当初はその固まらない状態を逆用されて幾分、スキの多い試合ぶりになっていたのではないか、と思う。

ハルトノの少年時代のプレーぶりがそれを証明しているように思う。『攻撃は最良の防禦だ』ということを態勢全体として示しているように思う。

クリヤーや、スマッシュ、ドロップ、いづれも、バック・コートで捕え、ヒットした直後の流れるような、ホーム・ポジションへの復帰、機を見ての鋭くひらめくような寄り身、これらはすべて〝基地〟を一歩前進させておくことを、絶対の前提条件として、練習を積み、ゲームに挑んできた精華ということができるのではなかろうか。

急行と特急との差

他のものが急行に乗っているときに、ハルトノは高い犠牲を払って、最初から特急に乗っていたようなものである。

これはハルトノの天成によるものか、すぐれた指導者の示唆によるものか。

日本女子プレーヤーの高木さんや湯木嬢の動きを見て、諸外国の選手や、指導者達はどう思っているのだろうか。

区々たる小手さきのテクニックや、かけひきでなく、勝負に徹する長期の計画というようなものが、どこかに存在するような気がしてならない。繰りかえし、強調する。シングルス・ゲームでの基地を前進せよ！

（熊本女子大教授）
日本協会競技力委員長　伊藤基記



〈距離〉(10)

長身，一般論では有利だが

弱い低目や体付近の処理

‖大型ダブルス，その長短‖（上）

元日本教職員連盟理事　三須徳次

大型ダブルスについて書くことになっておりますが、その前に一言、述べたいと思います。

バドミントンは一年中できるスポーツの一つですが、これからの季節は非常に寒いので、準備体操を励行して羽根打ちに励んで下さい。

いわゆるシーズンでの大会において、ケガをする選手が、必ずといえるほどおります。そこで開会式終了後に、全員で十分間程度の体操をして試合を始めるようにしたら、多少とも未然に防げるはずです。

大会に出場できる一流の選手達ですから、個人個人で準備体操はやっておるわけですが、主催・主管側からすれば、万全の体制で試合運営ができることになります。

そのうえに観戦の人達のなかには、どのような体操をしたらよいか分らないクラブ関係者が多いですから、一流プレーヤーが行なう体操をみて、よい参考と刺戟になります。

試合前の体操から観戦するようになってくれれば、出場選手も体操を一所懸命にやりますし、服装にも注意がはらわれることになります。

冬期でも練習はできますが、あまり試合のないこの期間は、むしろ反省期間として、フォームの矯正、技術的な工夫、来シーズンに備えて体力の養成→増強に重点をおくシーズンにすべきです。

バドミントン・ファンの一人として、私は心身の鍛練に、バドミントンは最高のスポーツと思ってはおりますが、スポーツ障害につきましては、一考を要します。

そこで精神的には、他のスポーツに、レクリエーション的に親しみ、気分転向をはかり、肉体的には、たとえばラケットを持たない腕で、ボールをつくなどの努力をして均衡性を養ないスポーツとしてのバドミントンで起こりがちな障害を取り除きバドミントンを推進させてゆくべきと考えております。

冬期の研究にはいりますので皆さんもいっしょに考えてみませんか。

さて、大型ダブルスの意味は強いということでなく、2名が長身者のダブルスでは、どのような点を考えのポイントとしたらいいか、モデル選手に登場してもらい説明を加えてゆきます。

背の低い選手達のほとんどがもう少し高かったらいいのだけれどと、よくいっているのを耳にします。ゲームではサービス以外は、高所で打つ場合の方が有利ですから、一般的に考えますと、背が高い人ほどよいわけです。

ところが、現在までの男子を例にとれば、170センチ以下の選手が、第一線で活躍していることが多く、外国選手でも世界チャンピオンに、シングルスでエ・デー・チュン、ダブルスではウン・ブン・ビー（パートナーは長身者）と背の低い選手もおります。

必要な頭脳、執念

持久力

ですからバドミントンは長身者が優位ではありますが、身長だけでは優劣を決められません。持久力、シャトルを追いかける執念、頭脳的なプレーなどに欠ければ強くはなれません。

反対に背の低い選手は、ジャンプ力、腹筋、手首の強化、スタミナ、技術面に注意をはらい、身長をカバーしているはずです。高い打点で打てない反面、下からのレシーブやボデー附近の処理が上手です。

従って175センチ以上の選手達に「君はもう少し背が高い方がよいと思うか」と質問したところ、答えは「もうこれ以上背は伸びなくてよい」ということでした。

おそらく上からの攻撃面においては満足できても、レシーブやボデー附近の処理に手こずることが多く、そのうえに足腰が弱いとか、動きがにぶいといった長身者共通の悩みがあるわけです。（続）

ココがききたい

初心者の疑問に答える

シャトルはなぜ飛ばない？

―あなたの間違いはここだ―

〈短期連載〉 第2回

秦　浩

前号では、シャトルをヒットするとき、いかにグリップとスイングが大切かを指摘しましたが、今回は一歩すすめて、それら二つの条件と関連して欠かすことのできないポイント「フットワーク」について考えてみましょう。

両足をそろえて立つ

フットワークの誤り

バドミントンにおける**フットワークの原則というのは、いかにしたら最もはやく、最もストロークをやりやすい地点に、バランスをくずすことなく、からだを到達させるか、ということに集約されます。**

これをもう少しくわしく分析してみると、次のようになります。

①相手がリターンしたシャトルがどのような球種でどの方向へ飛来してくるか、どの地点でヒットしたらよいか、また、どうすれば最も早くレシーブ体勢にはいれるかを瞬時に判断したのちに

②シャトルのコースを見極めながら、その降下する下にはいり込み、シャトルを打ち出す方向にむかって左足（右腕の場合は左足、左腕の場合は右足）を踏み出しながら重心を移行させ、フォロースルーに至り、さらにただちにホーム・ポジションへ戻り、次のリターンに備える――までの一連の脚の運びをいうわけです。

これらの動作は、どの部分もないがしろにはできない重要な動きなのですが、今回はこの中でも**初心者が犯かす、ごく初歩的な誤り、すなわち、ラケットがシャトルをヒットする瞬間の脚の在り方**について振り返ってみましょう（おことわりしておきますが、この講座で研究するフォームは、原則として全て基本打法であるオーバー・ヘッド・ストロークによるハイクリヤーを打つ場合を想定しています）

グリップはイースタン、スイングも無理なく、流れるように行なわれた。しかし、シャトルは思うように飛ばない。フォームもどことなくギゴチない……その時、あなたの脚はどのような状態、どのような動きをしていますか？

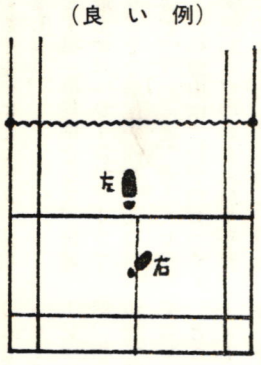
シャトルを打ち出す方向にむかって、ちゃんと踏み出し（ステップ）ていますか。

〝シャトルを捕えるのにせいいっぱい。脚までとてもかまっていられない、アシカラズ〟なんてシャレていては、はじまりません。

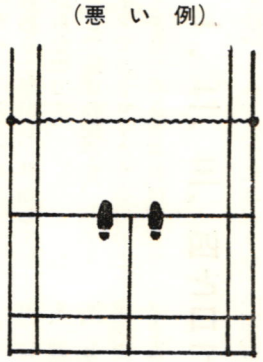
初心者に多く見られるケースの第一は、シャトルをヒットする瞬間に、両足がそろってしまっている場合が大変多いことです。

要するにベタ足というヤツ。これではいくらグリップやスイングが理想的であっても、また上体や腕に力を入れても、パンチのきいたストロークが生まれてくるわけがありません。

ステップ（踏みこみ）が大切



ネット（相手）に向って左足を踏み出しながらスウィングする（右ききの場合）



ネット（相手）と平行に足を置いた状態でスウィングする

ということは、なにもバドミントンに限ったものではありません。

野球、サッカーをはじめ、あらゆるスポーツでもシュートやバット・スイングなどの行動を起すとき、ステップは重要なる意味を含みます。

王、長島も泣いたステップ

ピッチャーの投球を、長島のバットがミートする瞬間、踏み出した彼の左足は、サード方向にむかって大きくアウト・ステップし、その結果、顔、上半身腕、腰、脚の動きがバラバラとなってしまい、腰が逃げ、顔はヘッドアップを誘発して、球を捕える目の位置を狂わせてしまった。

かろうじて、腕だけで当てるという結果となり、目のさめるような、ドライブのかかった打球が打ち出されなかった（打球に体重をのせることができなかった）ということです。

同じく巨人軍の王選手が、今年こそ〝三冠王〟の呼び声がかかりながら、五十本は確実といわれたホームランも三十九本、打率も二割八分台にとどまり、不振のシーズンに終始したのも、例の一本足のスタンスから投球をよび込んで、インパクトする瞬間のステップのタイミングに狂いがあったから、という意見もあります。

このように、日本のプロ野球界を代表する二大打者が、同じようにステップが原因でスランプにおちいった、ということをみても、スポーツにおいて踏み出し（ステップ）がいかに重要な役割を占めているかわかりま

野球を例にとってみましょう。昨年、巨人軍の長島選手が大スランプにおちいり、打率も三割を割ってしまったことは記憶に新しいところですが、このスランプの大きな原因が、ステップにあったということもまた周知のとおりです。

もうひとつ野球を例にとってみましょう。

〈バッター長島、ピッチャーは速球を武器とする江夏、第一球の構えから、大きくワインドアップ、投げました！　快速球！　ストライク！　さすがの長島もあぜんとこの投球を見逃しました……〉

この時、左腕江夏投手の右足はどういう動きをしていたでしょうか。ホームベース（ミットを構える捕手）へ向って大きく踏み出しているでしょう。

あの江夏投手の快速球も、決して腕力や上体のしなりだけで生まれてくるわけではありません。腕のスイング、上体のしなり、脚のステップ、腰の捻り、重心の移動、フォロースルー、一連のスムーズな流れがあって初めて生まれてくるのです。

江夏投手に限らず、投手板（プレート）に両足をそろえたまま、上体と腕のスイングだけで球を投げる投手などは、みたこともありません。

さて、ここでどうして私が野球の投手を例に出したか、説明しましょう。

まず第一の理由として、野球が最もポピュラーなスポーツであり、その動作がみなさんの目にふれやすいこと、そしていまひとつの理由は、投手のピッチングのからだの動き（肩や手首ヒジの使い方、腰のひねりなど）がバドミントンのストロークの動きと類似し、共通しているからなのです。

そこで野球の投手を、バドミントンでストロークする自分と置きかえて考えてみれば、自分が投手であり、相手は捕手ということであり、相手に向ってストロークする動作が、投球のモーションになるわけで、脚は当然、相手（打ち出す方向）へむかって踏み出していなければならないわけです。

ところがどうでしょう。バドミントンの初心者には、両足をネットと平行に置いたままヒットしている人が多いのです。これではいくら正しいグリップでも、理想的なスイングであっても、ヒットする瞬間、打球に体重がのらず、迫力あるストロークとならないわけです。

一、二、三、四と口で歩調を

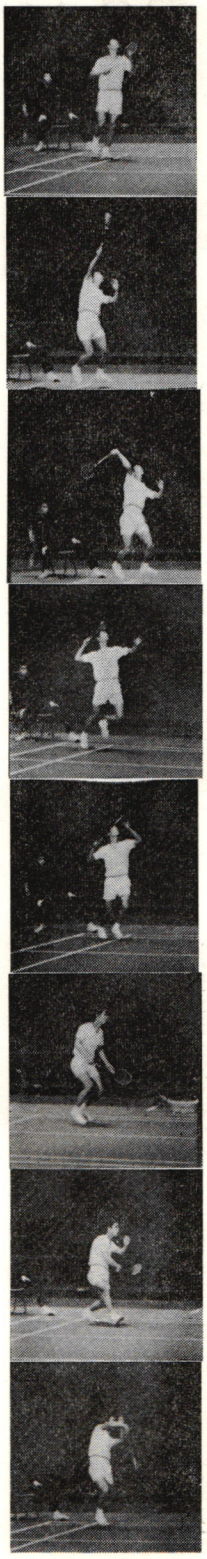
では、これを正すにはどうしたら一番よいでしょう。

つね日ごろストロークする際に、立ち止まり、つっ立ったままスイングするのではなく、必ず前後にステップしながら、口の中で〈一、二、三、四〉とかけ声をかけながらヒットするのです。

（一、でシャトルを呼び込み二で打ち出す方向に踏み出しながら、三でヒットし、四でフォロスルー、とやりながら一、二、三歩前進し、フライトが返ってくるのを見ながらステップ・バックして、また一、二、三、四、と繰返えすのです）。

ともかくベタ足は禁もつ、終始、つま先き立ちで、軽いフット・ワークを心がけて下さい。

このように
打てばよい



《表紙》

西尾真理子、秋本八代美、佐伯智子



久しぶり〝超高校級〟と噂の高いトリオである。西尾、秋本は大阪・四条畷学園高、佐伯は奈良・市立一条高と学校はちがうが、同じ関西同士で手の内を知りつくした三年生。ユ杯の候補からはもれたが、合宿に加えられ、先輩連とせり合った。

西尾、秋本が一躍、注目をあびたのは70年12月のインドネシア遠征、アジア大会代表に加えられてから。以後、お互い同士以外にはほとんど負けなしの勢い。全国高校選手権では団体戦で市一条が準決勝、四条畷が優勝したが、その時点まで三人とも連勝。個人のシングルスでも佐伯が西尾をくだし、秋本×佐伯が決勝を争って、秋本に栄冠が輝いた。「ライバルは佐伯」というのが秋本の弁。三人同じ東京の大学に進みたい、との話があるそうだ。

投寄稿稿をお待ちします

一般愛読者の皆さんはじめ、各都道府県協会・実業団・教職員・学生各連盟役員の方々、会員・指導者各位、関係者すべての皆さんにお願い。

投稿をお待ちしております。楽しい読みものと実用的手引きや参考になるもの――この二本柱を充実させていくには、残念ながら、編集部だけでは〝意あって力及ばず〟です。

先号から始った「ばどみんとん昔むかし」は、著者・八木橋さんの自発的な寄稿ですが、このように長い物語りでなくともけっこうです。身のまわりで見たこと聞いたこと、競技会やフィルムなどを見て感じたこと、他の競技の動きからヒントを得て考えたことなど、どんな小さなエピソードでもありがたくお受けします。

おかげさまで、最近は、各地から続々、試合の成績が寄せられ、一つ一つ、充分に掲載できないほどですが、お話や写真の方も、ひとつよろしく、ご協力をお願いします。

編集室

長い間の懸案だった外国選手の招待国際試合が、ユ杯の前衛戦というかたちで、ようやく実現することになった。デンマークは欧州で英国とならんで、最もバドミントンが盛んなところであり、この機会に大いにいろんなものを吸収してほしいと思う。

一方、男子でも一ユ杯に負けるな、と新年から男子ナショナル・チームが編成され、第一回の合宿を仙台でやる。本誌も日本協会機関誌として、ことあるごとに〝党内野党〟精神を発揮批判すべき点を批判してきたがそれが実りつつある感じ。協会さん、今後もがんばって!!

【バドミントン界】第27号
昭和46年10月25日 印刷
昭和46年11月1日 発行
編集兼発行人 川端昇市
発行所 東京都渋谷区神南一の一の一
岸記念体育館内
日本バドミントン協会
電話 四六八・三一一一(内線)二五一
四六七・七〇五四(直通)
郵便番号・一五〇
印刷所 東京都豊島区南大塚二―二九
明宏印刷株式会社
定価 一部 百三十円



●第二十六回国体（本文に掲載分を除く）

○一般男子

▼一回戦

香川 3－0 北海道
中原下 2 (15 15 15 / 10 17 3) 1 熊高 谷木
竹林 2 (15 15 / 1 12) 0 高木
中原 2 (15 15 / 8 7) 0 竹内
和歌山 3－0 山口
倉内本 2 (15 / 5 6) 0 沖城堀
山本 2 (15 / 3 3) 0 沖堀
岡 2 (17 15 8 / 16 6 15) 1 城
新潟 3－0 長崎
土田木 2 (15 15 / 1 5) 0 山町道田
鈴木 2 (15 15 / 6 6) 0 町田
土田 2 (15 15 / 5 1) 0 森重
奈良 3－0 香川
佐川野 2 (15 15 / 7 8) 0 木中原下
中井 2 (15 15 / 7 6) 0 竹林
西川 2 (15 15 / 3 6) 0 中原

▼二回戦

秋尾本 2 (15 15 / 3 6) 0 平山野田
大阪 3－0 千葉
山田 2 (12 11 8 / 9 2 11) 1 森田
関根 0 (4 2 / 11 11) 2 日比野
平野田 2 (15 15 / 8 12) 0 日比野田
千葉 2－1 岐阜
宮内 0 (3 0 / 11 11) 2 小浜
千葉 2 (11 11 / 5 0) 0 川本
千葉内 2 (15 15 / 7 12) 0 桶口浜
福島 2－1 長崎

●高校女子

▼一回戦

山本 2 (15 15 / 3 2) 0 河瀬
岡 1 (8 9 15 / 15 15 11) 2 井崎
倉山本内 2 (15 12 15 / 5 15 7) 1 河井瀬崎
和歌山 2－1 三重
小林 2 (15 15 / 10 11) 0 大場
折井 2 (18 15 / 17 9) 0 米山
小折井林 1 (10 15 0 / 15 13 15) 2 中米島山
神奈川 2－1 山形

秋本 2 (11 12 / 6 10) 0 山田
海老名 2 (11 11 / 0 3) 0 児玉
佐久間 2 (11 11 / 2 2) 0 松田
海老名川 2 (17 15 / 14 8) 0 渡児辺玉
新潟 3－0 北海道
西尾 2 (11 11 / 1 2) 0 関根
秋本 2 (11 12 / 6 10) 0 山田

●教員団子

▼一回戦

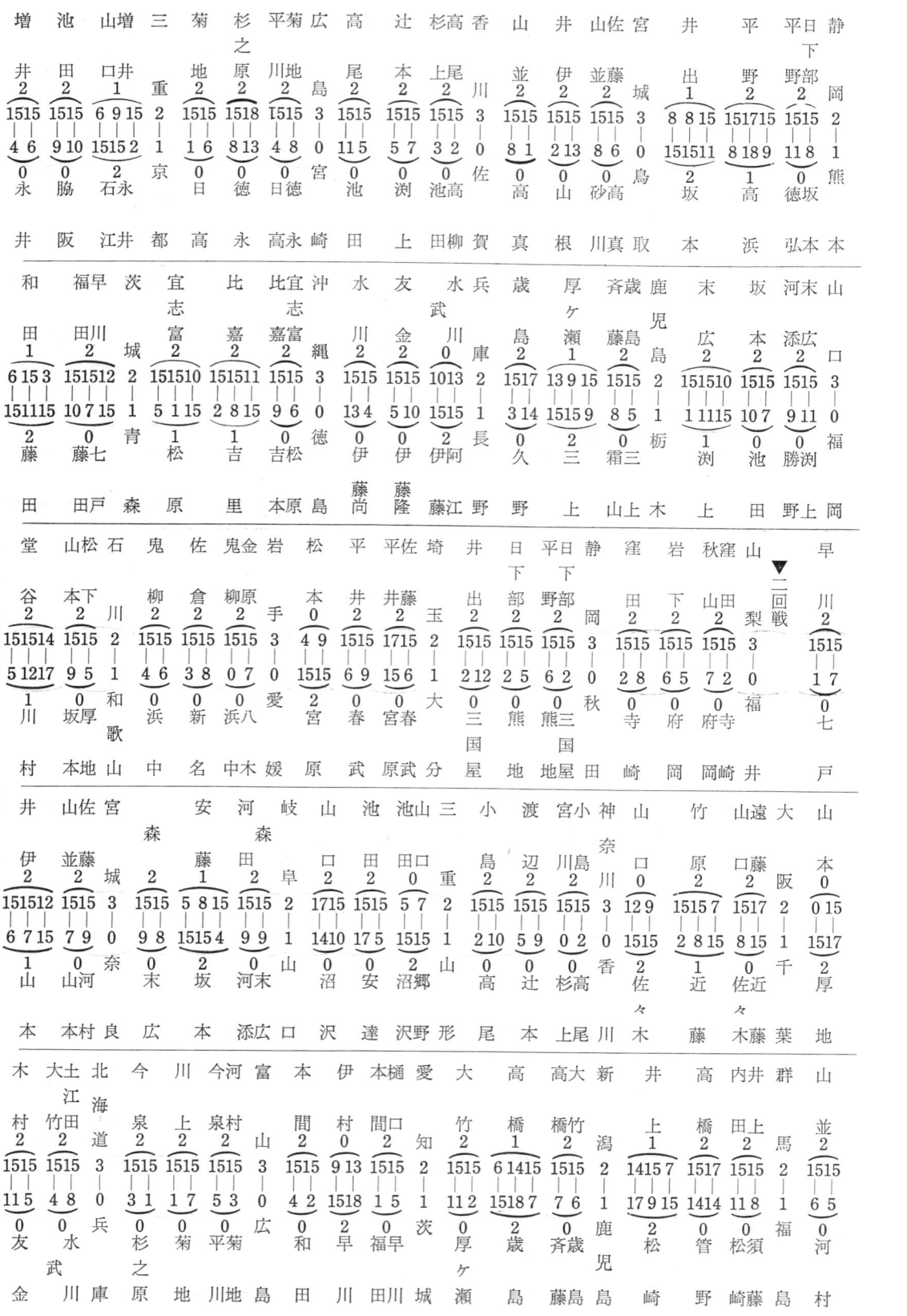
滋賀 2－1 愛知
別井 2 (15 15 11 / 7 7 15) 1 藤原
森田昇 2 (15 15 / 5 0) 0 森田桂
別森田井 2 (15 15 / 9 12) 0 藤森原田
栃木 3－0 香川
宮内 0 (5 2 / 11 11) 2 白玖
千葉 2 (11 11 / 2 6) 0 高国
宮内葉 2 (15 13 18 / 12 15 15) 1 大白矢根玖
福島 2－1 香川
平田 2 (11 11 / 5 2) 0 平田
林 2 (11 11 / 1 6) 0 湯川
平林田 2 (15 15 / 7 3) 0 平湯田川
岡山 3－0 和歌山
海老名 2 (11 11 / 0 3) 0 児玉
佐久間 2 (11 11 / 2 2) 0 松田
海老名川 2 (17 15 / 14 8) 0 渡児辺玉
新潟 3－0 北海道
西尾 2 (11 11 / 1 2) 0 関根
秋本 2 (11 12 / 6 10) 0 山田

藤原上 2 (15 15 / 4 5) 0 清平水松
藤原 2 (15 15 / 5 2) 0 八神
久保田 0 (15 6 / 17 15) 2 平松
岩手 2－1 栃木

▼二回戦

佐々木邦彦 2 (15 12 15 / 6 15 11) 1 森別田井
清水 0 (8 8 / 15 15) 2 森田
佐々木 2 (15 15 / 12 6) 0 別井
佐中藤西 2 (15 12 15 / 7 15 13) 1 柳三本宅
和歌山 3－0 岡山
森 2 (15 15 / 5 7) 0 毛利
中西 2 (15 15 3 / 5 7 15) 1 三宅
熊本 2－1 北海道
本工郷藤 2 (15 15 / 0 2) 0 杉宮田崎
南 0 (6 8 / 15 15) 2 宮崎
工藤 2 (15 15 / 5 9) 0 杉田
滋賀 3－0 石川
藤原上 2 (18 18 / 16 15) 0 北原方
藤藤原 2 (18 15 / 14 9) 0 和田
藤上 2 (15 15 / 3 7) 0 原
久保田 2 (17 15 / 14 9) 0 和田

藤原上 2 (15 15 / 4 5) 0 清平水松
藤原 2 (15 15 / 5 2) 0 八神
久保田 0 (15 6 / 17 15) 2 平松
厚地本 2 (15 15 / 0 1) 0 山岩田根
和歌山 3－0 島根
川村 2 (15 15 / 8 3) 0 南木
坂本 2 (15 15 / 7 1) 0 岩田
千葉 2－1 岡山
近藤 2 (15 15 / 7 6) 0 小松
佐々木藤 2 (15 15 / 11 8) 0 芳上野山
近藤 2 (15 15 / 6 14) 0 平野
吉岡 0 (14 13 / 17 15) 2 上野
福井 2－1 長崎
岡崎 2 (15 15 / 5 12) 0 平山野口
府寺本 0 (9 9 / 15 15) 2 前田
寺崎 2 (15 17 / 6 14) 0 平野
大分 3－0 高知
原武 2 (15 15 / 8 5) 0 前豊田島
宮原 2 (15 15 / 6 2) 0 武村
春武 2 (15 15 15 / 3 7 18) 1 豊島
春宮 2－1 滋賀
須藤 2 (18 15 / 14 8) 0 小田島中
福管 0 (1 2 / 15 15) 2 田中
松須崎 2 (15 15 / 4 2) 0 平岩


増井 池田 山口井 三重 菊地 杉之原 平菊川地 広島 高尾 辻本 杉上尾 香川 山並 井伊 佐藤並 宮城 井出 平野 日下部 静岡
永脇 石永 京 日徳 徳 日徳 宮 池 渕 池高 佐 高 山 砂高 鳥 坂 高 徳坂 熊本
井 阪 江井 都 高 永 高永 崎 田 上 田柳 賀 真 根 川真 取 本 浜 弘本 本
和田 福田川 茨城 宜志富 比嘉 比宜志嘉富 沖縄 水川 友金 水武川 兵庫 歳島 厚ヶ瀬 斉歳藤島 鹿児島 末広 坂本 河末広添 山口
藤 藤七 青 松 吉 吉松 徳 伊 伊 伊阿 長 久 三 霜三 栃 渕 池 勝渕 福
田 田戸 森 原 里 本原 島 藤尚平 藤隆佐 藤江 野 野 上 山上 木 上 田 野上 岡
堂谷 山松本下 石川 鬼 佐 鬼金原 岩手 松本 平井 平佐井藤 埼玉 井 日下部 平日下野部 静岡 窪田 岩下 秋山田 山梨 ▼二回戦 早川
川 坂厚 和歌山 浜 新 浜八 愛 宮 春 宮春武 大 三国屋 熊 熊三国 秋 寺 府 府寺 福 七
村 本地 中 名 中木 媛 原 武 原武 分 屋 地 地屋 田 崎 岡 岡崎 井 戸
井 山佐 宮城 安 河 岐阜 山口 池 池田口 三重 小島 渡辺 宮川島 神奈川 山口 竹原 山藤口 遠 大阪 山本
伊並藤 森 藤 森田 沼 安 沼郷 山 高 辻 杉高 香 佐々 近 佐近 千 厚
山 奈良 末 坂 河末 山 沼 安 郷 形 尾 本 上尾 川 木 藤 木藤 葉 地
本 本村 広 本 添広 口 沢 達 沢野 形 尾 本 上尾 川 木 藤 木藤 葉 地
木 大土江 北海道 今 川 今河 富山 本 伊 本樋口 愛知 大 高 高大 新潟 井 高 内井 群馬 山
村 竹田 泉 上 泉村 間 村 間口 知 竹 橋 橋竹 鹿児島 上 橋 田上 並
友 水 武川 兵庫 杉之原 菊 平菊地 和 早 早 茨城 厚ヶ瀬 歳 斉歳 島 松 管 松須 福 河
金 川 地 川地 島 田 川 田川 城 瀬 島 藤島 崎 野 崎藤 島 村

▼三回戦

土江田 2 (15 15 9 / 3 12 15) 1 水沼 川
東京 3 — 0 沖縄
池田 2 (15 15 / 6 7) 0 比嘉
池田 2 (15 15 / 6 7) 0 比嘉
鈴木 2 (15 15 / 6 4) 0 宜志富
池田 2 (15 15 / 6 7) 0 比嘉
山梨 2 — 0 岩手
窪田 2 (15 18 / 6 16) 0 鬼佐倉
岩下 2 (15 / 9 10) 0 金原
大阪 2 — 0 静岡
竹原 2 (15 15 / 2 3) 0 平野
遠藤 2 (15 15 / 8 8) 0 平日下部
小島 2 (15 15 / 9 2) 0 佐山並藤
神奈川 2 — 0 宮城
渡辺 2 (15 15 / 5 1) 0 井伊玉
石川 2 — 1 埼玉
松下 2 (15 15 / 7 5) 0 佐平藤井
山本 2 (15 15 / 10 7) 0 松本馬
堂谷内 0 (5 8 / 15 15) 2 平井
森田 2 (15 15 / 4 10) 0 井内上田
岐阜 2 — 0 群馬
河田 2 (15 15 / 5 4) 0 井上

▼準々決勝

新潟 2 — 0 三重
大竹 2 (15 15 / 6 6) 0 池山口田
高橋 2 (15 18 / 7 13) 0 池田山
愛知 2 — 0 富山
樋口 2 (15 18 / 11 15) 0 今河泉
本間 2 (15 15 / 7 3) 0 川上
東京 2 — 0 北海道
池田 2 (15 15 / 7 8) 0 大土江竹村
鈴木 2 (15 15 / 8 12) 0 木村
神奈川 2 — 0 新潟
小島 2 (15 15 / 1 6) 0 高橋竹
渡辺 2 (15 15 / 0 7) 0 中山
岐阜 2 — 1 石川
森田 2 (15 15 / 4 12) 0 山松本下
河田 0 (5 10 / 15 15) 2 堂谷
森 2 (15 15 / 0 5) 0 山本
梨 2 — 1 大阪
山田 2 (15 12 15 / 11 15 6) 1 山遠藤口
窪田 2 (15 12 15 / 11 15 6) 1 山遠藤口
下 0 (11 8 / 15 15) 2 竹原
山 2 (15 15 / 0 8) 0 山口
知 2 — 0 東京

▼二回戦

新潟 3 — 0 長崎
木 2 (18 8 / 16 15) 1 柿徳永
本間 2 (11 11 / 2 13) 1 柿本
後藤 2 (18 8 / 16 15) 1 柿徳永
本 2 (11 11 / 10 12) 1 福永
秋山 2 (11 6 / 10 11) 1 福永
蓼 2 (11 11 / 1 2) 0 池田
味蓼田 2 (17 15 / 14 4) 0 原池田百
味蓼田 2 (17 15 / 14 4) 0 原池田百
神奈川 3 — 0 兵庫
本 0 (3 2 / 11 11) 2 大橋藤
永 2 (11 11 / 4 0) 0 工藤
本永 2 (15 12 17 / 5 15 14) 1 池大橋田
崎 2 — 1 愛知
追 2 (11 11 / 8 8) 0 宜保地
口 2 (11 11 / 0 6) 0 下地
追 2 (15 15 / 1 2) 0 宜下保地
山 3 — 0 沖縄

●一般女子

▼一回戦

本間 2 (15 5 15 / 11 15 11) 1 鈴木
本間 2 (17 15 10 / 16 13 15) 1 池堺田
本 2 (15 5 15 / 11 15 11) 1 鈴木
本間 2 (17 15 10 / 16 13 15) 1 池堺田
樋口 2 (17 15 10 / 16 13 15) 1 池堺田
岡山 3 — 0 沖縄
追 2 (11 11 / 8 8) 0 宜保地
口 2 (11 11 / 0 6) 0 下地
剛 2 (11 11 / 8 8) 0 宜保地
崎 2 — 1 愛知
永 2 (11 11 / 4 0) 0 工藤
本永 2 (15 12 17 / 5 15 14) 1 池大橋田
本 0 (3 2 / 11 11) 2 大橋藤
味蓼 2 (11 11 / 1 2) 0 池田
味蓼田 2 (17 15 / 14 4) 0 原池田百
秋山 2 (11 6 / 10 11) 1 福永
木 2 (18 8 / 16 15) 1 柿徳永
後藤 2 (18 8 / 16 15) 1 柿本
間 2 (11 11 / 2 13) 1 柿本
新潟 3 — 0 長崎

▼準々決勝

後藤 2 (11 11 / 6 7) 0 徳永
形 2 — 1 和歌山
山 2 (15 11 / 18 15) 1 加岡藤
尾上藤 2 (15 11 / 10 15) 1 加岡藤
村 0 (2 7 / 11 11) 2 岡
遠藤 2 (11 12 / 2 11) 0 加藤
北海道 2 — 1 岡山
村田 2 (15 15 / 5 9) 0 剛浦口迫
今川 0 (2 1 / 11 11) 2 浦口
高野 2 (15 15 / 5 9) 0 剛浦口迫
村田 2 (12 11 / 11 7) 0 剛迫
神奈川 2 — 1 香川
味蓼 2 (11 11 / 5 5) 0 小西
味蓼田 2 (15 18 / 3 17) 0 薗井浦
秋山 0 (6 4 / 11 11) 2 井上

■一般男子団体

滋賀A 3 — 1 熊本、石川 3 — 2 東京、富山 3 — 0 神奈川、岩手 3 — 2 栃木

▼準決勝

滋賀A 3 — 1 石川、富山 3 — 1 岩手

●第10回全日本教職員選手権大会（8月9—12日・岡山県営体育館）

■一般女子団体

▼準々決勝

東京2 — 0 滋賀、千葉2 — 1 大阪A、長崎2 — 0 神奈川、栃木2 — 0 埼玉

▼準決勝

東京2 — 0 千葉、栃木2 — 1 長崎

▼決勝

東京 2 — 0 栃木
功力 2 (15 15 / 3 2) 0 小石林崎
高木 2 (11 11 / 0 1) 0 小林

■成壮年団体

▼準々決勝

熊本2 — 0 東京B、岡山A 2 — 0 大阪A、三重2 — 0 東京A、千葉2 — 0 大阪B

▼準決勝

岡山A 2 — 0 熊本、千葉2 — 1 東京A

▼決勝

岡山A 2 — 0 千葉

▼決勝

滋賀A 3 — 1 富山
藤原 2 (15 15 / 4 2) 0 正木
藤上 2 (15 15 / 3 2) 0 中嶋
藤田部 0 (8 13 / 15 15) 2 正清木水
藤原 2 (15 15 / 3 3) 0 中嶋不破

小松 2(15-11)0 田中
今野 東牧 利河 2(15-10)0 辺橋
毛山 上高

■一般男子シングルス
▼準々決勝
工藤（熊本）2―1森田（栃木）、長谷川（石川）2―0藤上（滋賀）、関（東京）2―0森（和歌山）、清水（富山）2―0杉田（神奈川）
▼準決勝
工藤2―0長谷川、関2―1清水
▼決勝
関 2(15-10)0 工藤

■一般男子ダブルス
▼準々決勝
三宅・柳本（岡山）2―0藤原・藤上（滋賀）、関・瀬戸（東京）2―0佐々木・佐々木（岩手）、別井・森田（栃木）2―1清水・正木（富山）、工藤・芦原（熊本）2―1北方・長谷川（石川）
▼準決勝
関・瀬戸2―0三宅・柳本、工藤・芦原2―0別井・森田
▼決勝
瀬関戸 2(15-9)0 工藤芦原

■一般男子ダブルス
▼準々決勝
天野（岐阜）2―0宮本（埼玉）、功力（東京）2―0木村（千葉）、鎌田（秋田）2―0池尻（千葉）、徳永（長崎）2―1光中（香川）
▼準決勝
功力2―0天野、鎌田2―0徳永
▼決勝
鎌田 2(11-7)0 功力

■一般女子ダブルス
▼準々決勝
飯田・永原（富山）2―0落合・茂木（神奈川）、宮本・光中（埼玉）2―0池尻・木村（千葉）、加藤・森田（和歌山）2―0石田・石崎（栃木）、山下・徳永（長崎）2―0堀井・内海（大阪）
▼準決勝
宮本・光中2―0飯田・永原、加藤・森田2―1山下・徳永
▼決勝
宮光 本中 2(15-11)0 加藤森田

■混合ダブルス
▼準決勝
清水・飯田2―1関・功力、上原・天野2―1松田・徳永
▼決勝
清飯 水田 2(15-10)0 上原天野

■30才男子シングルス
▼決勝
西南 田田 2(15-11)1 大世古南

■30才男子ダブルス
▼決勝
西南 田田 2(15-6)0 北野

■40才男子シングルス
▼決勝
毛利 2(15-6)0 山上

■40才男子ダブルス
▼決勝
毛山 利上 2(15-4)0 本沢 郷田

◉第18回北陸三県総合競技大会
（6月13日、高岡商業高校体育館）

【富山県対福井県】
（一部男子）
■一般
富山県 8―1 福井県
▼壮年ダブルス
高木・竹島2―1畑・朝見
▼成年ダブルス
川上・桶沢2―0高木・糸谷
▼成年シングルス
桶沢 2―0 糸谷
▼青年ダブルス
河村・今泉2―0笠川・近藤
清水・折橋2―0山本・牧田
関村・宮林2―1寺崎・府岡
▼青年シングルス
今泉 2―0 笠川
関村 2―0 山本
東 0―2 寺崎
■一般女子
富山県 2―1 福井県
▼ダブルス
荒俣・沼 0―2安間・島田
▼シングルス
沢田 2―0 稲木
飯田 2―0 角谷
（二部男子）
■高校
富山県 5―0 福井県
▼ダブルス
下田・梅本2―1水上・大道
内生蔵・畠2―0原・出口
▼シングルス
別森 2―1 石川
笠谷 2―1 箕野
藤木 2―0 前田
（二部女子）
■高校
富山県 3―2 福井県
▼ダブルス
大井・西田0―2藤井・竹内
島田・矢地2―0大野・山田
▼シングルス
黒田 2―0 川崎
草開 2―1 大久保
竹端 0―2 中村

【石川県対福井県】
（一部男子）
■一般
石川県 5―4 福井県
▼壮年ダブルス
桜木・供田1―2朝見・畑
▼成年ダブルス
北方・奥村2―0高木・糸谷
▼成年シングルス
奥村 2―0 高木
▼青年ダブルス
松下・山本2―0牧田・山本
中田・東0―2梶谷・笠川
原・長谷川1―2寺崎・府岡
▼青年シングルス
高橋 2―0 近藤
原 0―2 山本
長谷川 2―1 寺崎
（一部女子）
■一般
福井県 2―1 石川県
▼ダブルス
安間・島田0―2富田・庭田
▼シングルス
稲木 2―1 沢野
角谷 2―0 田中
（二部男子）
■高校
石川県 4―1 福井県
▼ダブルス

米田・原 2―0石川・前田
山下・谷島2―0原・出口
▼シングルス
高木 2―0 大道
高本 0―2 水上
船本 2―0 箕野
（二部女子）
■高校
石川県 3―2 福井県
▼ダブルス
南・梶 2―0大野・山田
石代・坂口1―2藤井・竹内
▼シングルス
架谷 2―0 川崎
小原 0―2 大久保
藤江 2―1 中村

【富山県対石川県】
（一部男子）
■一般
富山県 9―1 石川県
▼壮年ダブルス
高木・竹島2―0桜木・供田
▼成年ダブルス
川上・桶沢2―1北方・奥村
▼成年シングルス
川上 2―0 奥村
▼青年ダブルス
河村・今泉2―1松下・山本
関村・宮林2―0中田・東
清水・折橋2―0長谷川・高橋
▼青年シングルス
関村 2―1 原

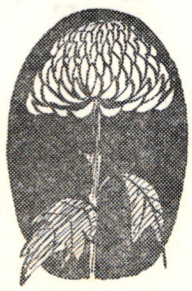
今泉 2―0 高橋
清水 2―0 長谷川
（一部女子）
■一般
富山県 2―1 石川県
▼ダブルス
沼・荒俣1―2富田庭田
▼シングルス
沢田 2―1 沢野
飯田 2―0 田中
（二部男子）
■高校
石川県 5―0 富山県
▼ダブルス
米田・原 2―1別森・笠谷
山下・谷島2―1内生蔵・畠
▼シングルス
船本 2―1 下田
高本 2―1 梅本
高木 2―1 藤木
（二部女子）
■高校
石川県 3―2 富山県
▼ダブルス
南・梶 2―0大井・西田
石代・坂口2―1草間・竹端
▼シングルス
架谷 2―0 矢地
小原 0―2 島田
藤江 0―2 黒田
（総合成績）
■一部男子一般
①富山県②石川県③福井県
■一部女子一般
①富山県②福井県③石川県
■二部男子高校
①石川県②富山県③福井県
■二部女子高校
①石川県②富山県③福井県
◉第14回中国実業団選手権（7月17―18日・日本鋼管福山体育館）
■一般男子シングルス
▼準決勝
菊地 2―0 杉之原（山陽パール）
（北川鉄工）
河添 2―0 矢野（日立造船）
（宇部興産）
▼決勝
河添 2―0 菊地
■一般男子ダブルス
▼準決勝
末広・河添 2―0 小松・藤井
（宇部興産）（岡山市役所）
上野・芳上 2―0 杉之原（山陽パール）岡（三菱広島）
（三井造船）
▼決勝
上野・芳上 2―0 末広・河添
■一般女子シングルス
▼準決勝
浦口 2―0 水田
（国鉄岡山）（日本生命）
西村 2―0 藤原
（下関市役所）（NHK）
▼決勝
浦口 2―0 西村
■一般女子ダブルス
▼準決勝
木村（中国銀行）鈴木（中国銀行） 2―0 藤原・池田（鋼管福山）
水田（日本生命）西村（下関市役所） 2―0 浦口（国鉄岡山）笹尾（富山保育園）
▼決勝
水田・西村 2―0 木村・鈴木
■壮年男子シングルス
▼準決勝
井原 2―0 西村
（国鉄後藤）（三井造船）
岡本 2―0 明珍
（岡山市役所）（三井造船）
▼決勝
岡本 2―1 井原
■壮年男子ダブルス
▼準決勝
佐々木・松永 2―0 明珍・西村
水（国鉄後藤） （三井造船）
水川・岡本 2―0 虹江・高松
（岡山市役所）（三井造船）
▼決勝
佐々木・松永2―1水川・岡本
■団体男子
三井造船A 3―0 鋼管福山
宇部興産 3―2 岡山市役所
▼決勝
宇部興産 3―1 三井造船A
■団体女子
▼決勝
鋼管福山A 2―1 鋼管福山B

全日本の豪華プロさしあげます

全日本選手権大会のプログラムを愛読者に進呈します。

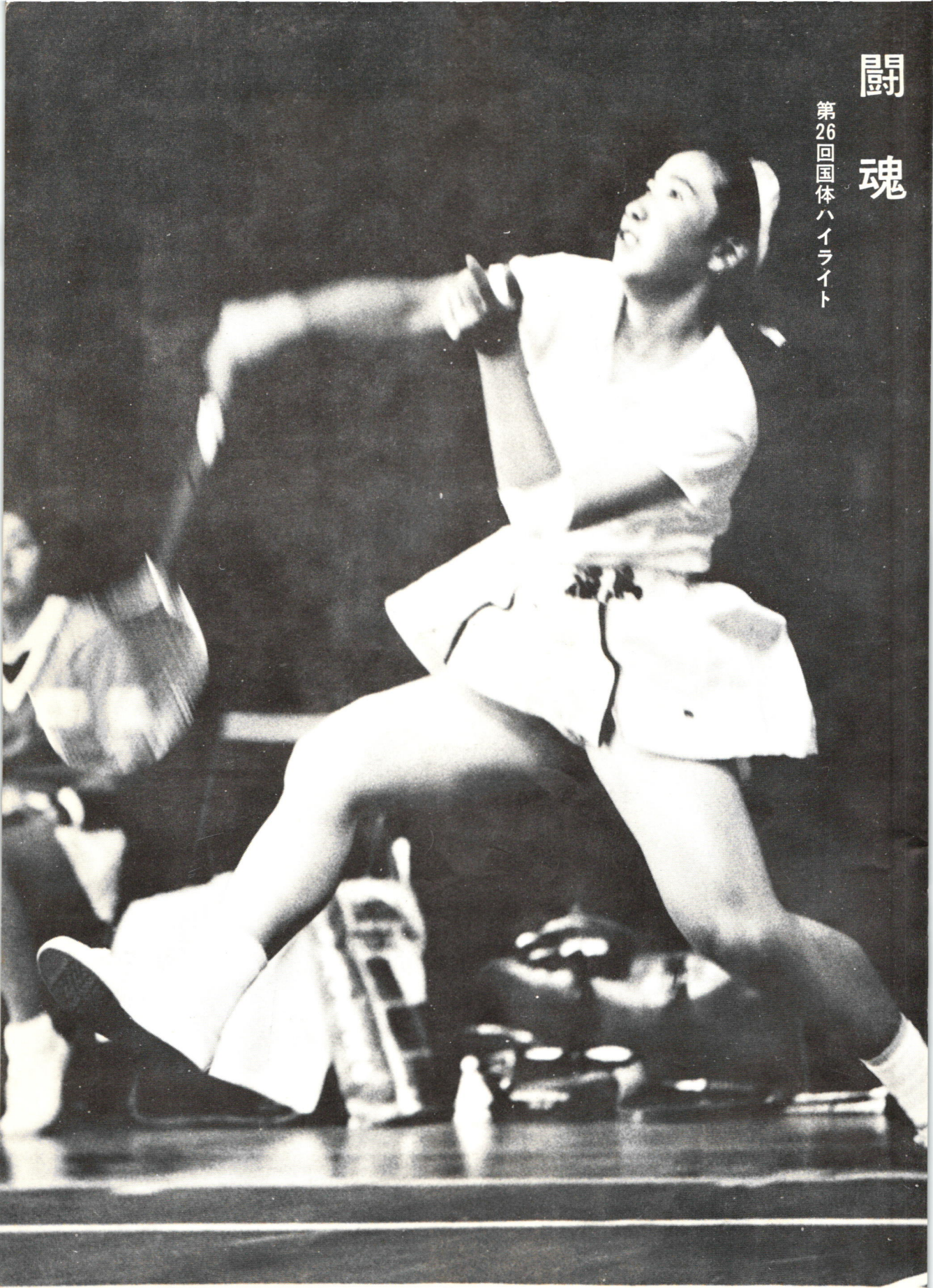
本誌でおなじみの日本協会広報スタッフが制作したもので、中国問題やユ杯の話題よみもの、ことしの主な大会記録、帰代優勝一覧、とくに楽しいのは、主要選手の写真がはいっていることです。

大会終了後、全記録を別刷りプリントで添付いたします。プロは無料ですが、送料として五十円分の切手をお送り下さい。先着、二百部に限り、ご送付いたします。よろしく。



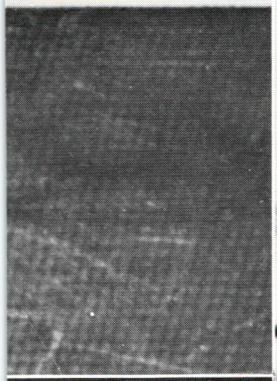
闘魂

第26回国体ハイライト

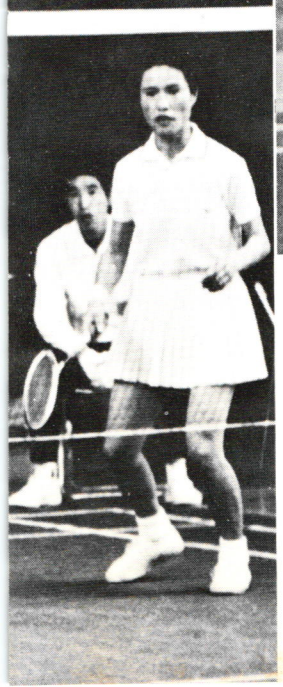


from the 26th National Sports Festival
at Wakayama, a "land of orange"











高校・地元和歌山勢も健闘

国体は、全日本とはちがい、それなりにおもしろいものだ。なぜなら〝郷土の栄光〟という金文字が、そこにあるからだ。

スポーツは自分が好きでやるもの——には、たしかにまちがいないが、いくら世の中が、公害時代〟〝火炎ビン時代〟に変っても、人々の郷土意識は変わらない。

ふるさとは、遠くにありて思うもの、そして国体のたびに、意識するもの。それでもけっこう。がんばろう、という気持ちがそこからわいてくる。

地元にとって、国体はまた格別なものだ。開催地の面目にかけて、と、それもスポーツ振興のエネルギーになる。そのエネルギーが、長続きして、今後とも、開催県から、すばらしいバトミントン愛好者が続出し、愛好することによって、しあわせになれるよう、願わずにいられない。

一般女子・新潟　この1勝が同県に総合優勝の栄冠をもたらした



高校勢のトップ大阪の秋本（八代美、幸子）姉妹



一般女子・神奈川のミセス・コンビ

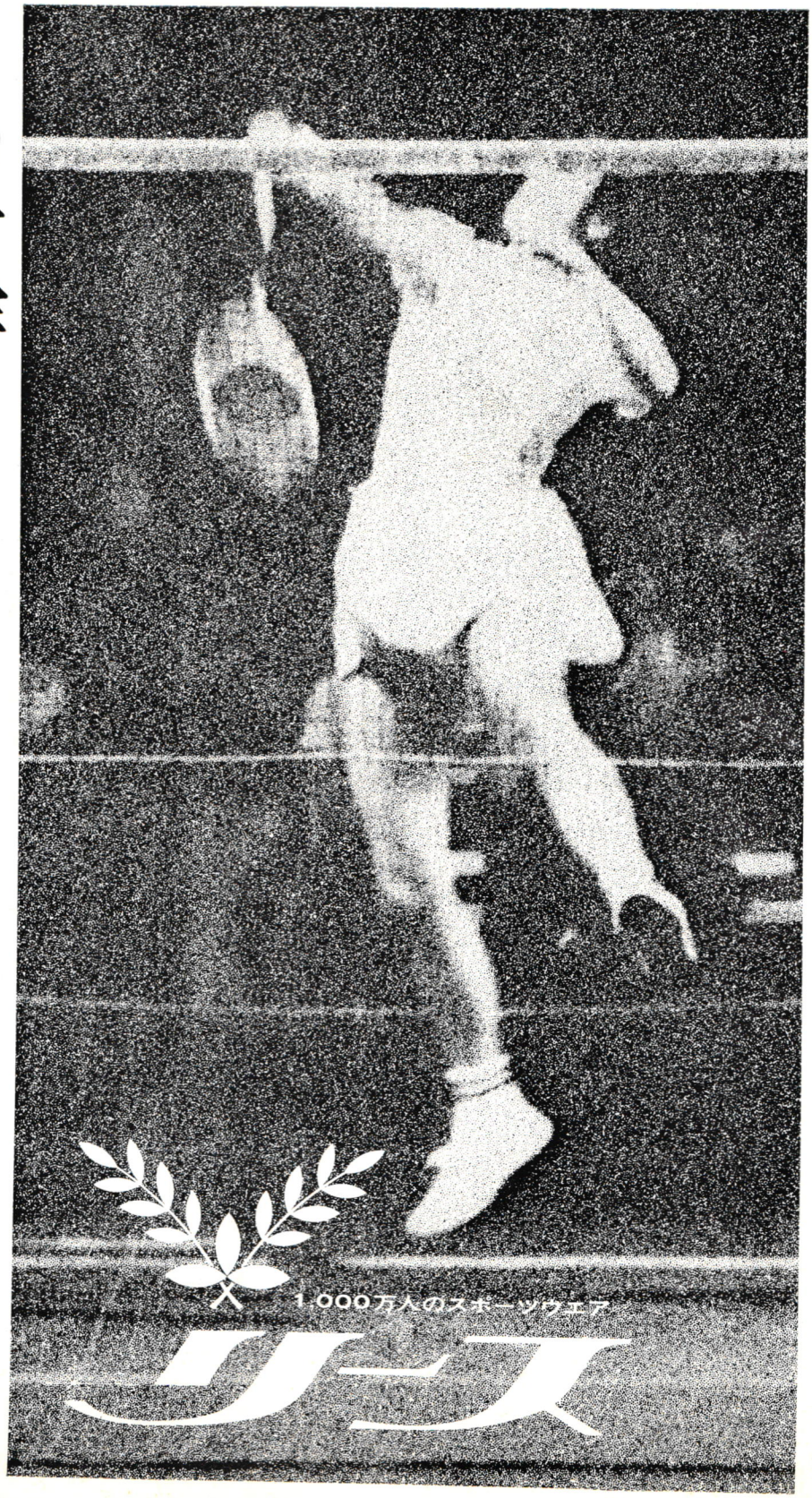


一般男子・神奈川



一般男子・山梨

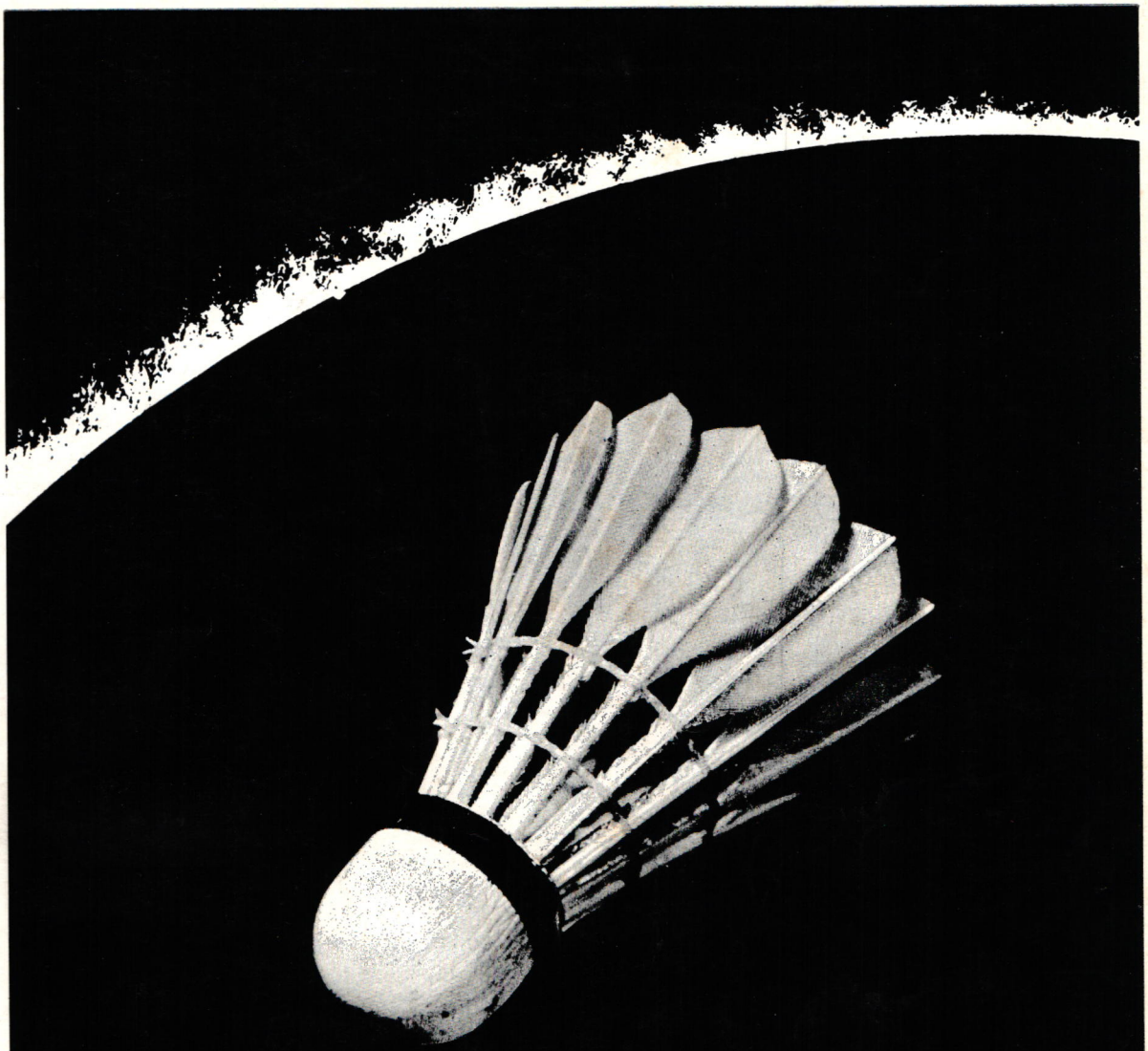
この一瞬!!



あなたはひかる――はげしい動き、ふき出す汗、すべての条件をプレイヤー本位に満たすカワサキの〝リース〟はあなたのウエアです。

K TOKYO
河崎ラケット工業株式会社
東京都台東区台東2-28-5 電話(831)-1884・0453

月刊「バドミントン界」第27号
昭和四十六年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
東京都渋谷区神南一ノ一ノ一
日本バドミントン協会
定価五十円



新しい現代に生きるあなたの
「心」を捉えて離さない
――――サンバタキング――――

Sun Batta TOKYO
サンバタ